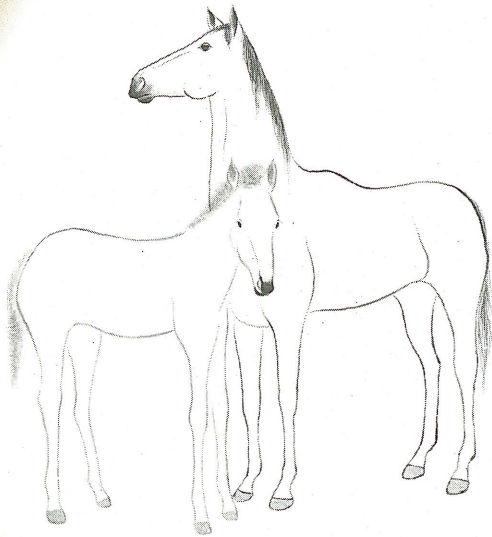
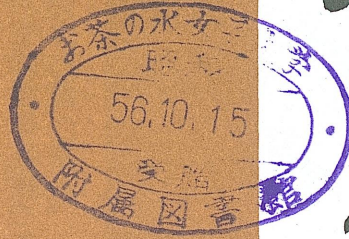


# 幼児の教玄月



11

第八十卷第十一号

日本幼稚園協会

家庭・保育所・幼稚園

# 幼児の手遊び・指遊び

仲田安津子著・B6判・144頁・6000円・T2500円

子ども自身が遊びをつくりだし、みんないつしよに遊べます。

指遊び、数遊び、ジャンケン遊び、語りかけ遊び、コチヨコチヨ、問答遊び、名称遊びの七つをイラスト付で紹介。いずれも体全体を使つての遊びで、二、三歳児から遊べます。



みんなで たのしむ

# 折り紙あそび

荒川智子著・B5判・64頁・1,200円・T1500円

子どもにも折れるやさしい折り紙作品100余を美しいカラー写真で紹介。誕生カード、室内構成のアイデアもあり、明日の保育を楽しくしようという時の虎の巻としておすすめです。





第八十卷 第十一号

# 幼児の教育 目次

——第八十卷 十一月号——

© 1981  
日本幼稚園協会

自己のいのちを生きるとき……………河辺 杲…(4)

創刊八十周年記念連載インタビュー

児童研究と保育(3)……………牛島 義友…(6)

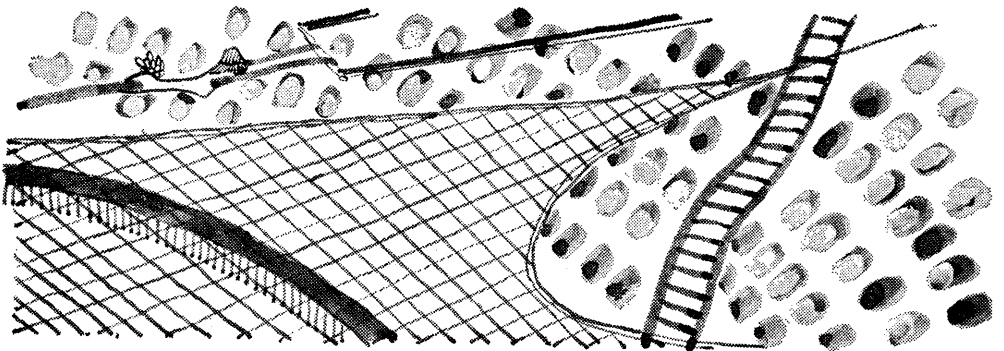
歴史人口学からみた生と死 十一……………鬼頭 宏…(17)

『幼児の教育』戦後篇復刻のお知らせ……………(23)

私の幼児教育論……………村瀬 聿男…(24)

ブリュンゲルの「子供の遊戯」(3)……………森 洋子…(28)

——ブランコ遊びから目隠し鬼ごっこまで——



エリクソンと幼児教育(5)……………仁科弥生(40)

子どもとの出会いの中で学ぶこと⑥……………水沼昭子(48)

☆講演

構造を把握する力の弱い子どものための

家庭内治療……………J・F・W・コック(50)

——現代の生んだ情緒障害児——

史料紹介

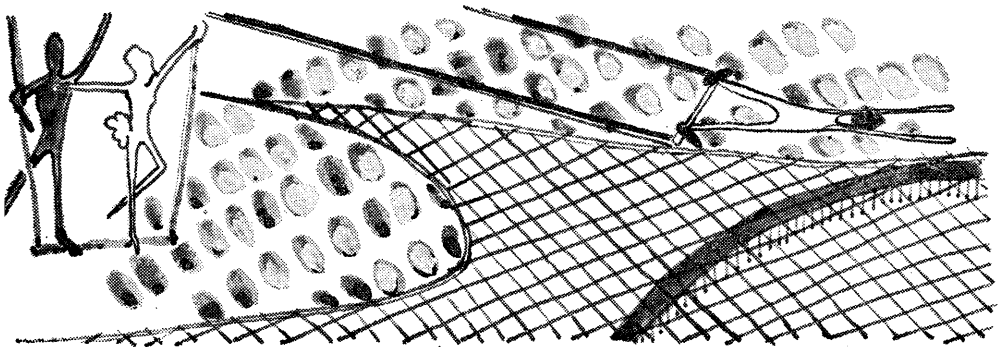
『邦訳 日葡辞書』⑤……………(61)

——わが國中世の児童文化史研究によせて——

表紙……………紙・中村 宗弘

表紙題字……………比田井和子

カット……………福田 理恵



# 自己のいのちを生きるとき

## 河辺 杲



ある年の初冬、知人の案内で神宮外苑を訪れた時、神宮の入口に立てられてある二つの「定」の掲示が目についた。ひとつは櫓のような材で作られた屋根つきの立派な掲示板であり、いまひとつは白いペンキの小さな板で作られた立札といった感じのものであった。内容はいづれも「定」書で、前者には「一、車馬ヲ乗入レルコト。一、魚鳥ヲ捕ルコト。一、竹木ヲ伐ルコト。右境内ニ於テ禁ス 大正九年十一月一日」と記されており、後者にはこの三項目を補足したもの——車を参道や車止区域内に乘入れること。一、魚鳥や昆虫を捕えること。一、竹木を伐ったり折ったり林内に入り、植物木の実を採集すること。——をはじめ動物を連れて入ること、許可

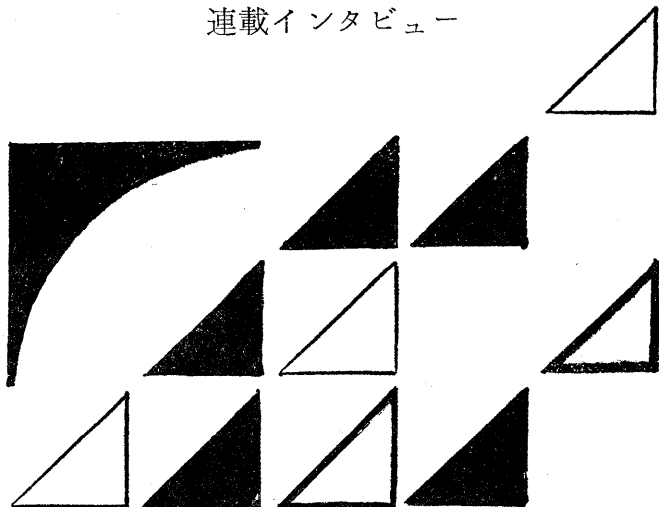
なくのぼり、プラカード等を掲げること。スポーツ競技又は練習すること。許可施設以外に歌舞音曲を行うことなどをはじめとして、その他に物品の販売、営業。募金勧誘宣伝文書の配布。映画及宣伝の撮影。危険物の持ち込み。集会を催すこと。秩序風紀を乱す行為。等一四項目にわたり掲示された。「境内において禁止します」と付記されていた。これには年月日が記されていなかったが内容からみて戦後に書かれたものに違いないと判断できた。大正九年の簡潔にして要を得た三項目の「定」書が約五倍の一四項目になっている二つの掲示から三〇年の時代の変遷を縮少してそこに見る思いがした。また同時に戦前の目に見えない個人や社会の中にあつた

心の枠組が打ちくだかれたり、見失ったことにより、なにか自由になつたような解放感とは逆に何倍もの具体的な外部枠としての定書のようなものが必要になつて来たのだとも思つた。ともかく戦後さらに三〇年近くを経た今日では法律等はもとより身近な生活のルールが細かくなつて来ていることは事実であり、外部枠による生活の規制が目に見えないところで働いていて、そのことにより秩序が保たれて来ているのだらう。しかし反面このような社会の枠組によつて随分細かいことに神経をすりへらして生活していることもたしかだと思ふ。またこれらの外からの規準枠のようなものが自分自身のものとして充分とり入れられなくて攻撃的な感情を高ぶらせたり、これらの社会のルールの裏道を考えるような人間が多く出たりすることによりイライラし易くなつたり、さらに心の深層に押しこんでしまつたためか無関心をきめこんだりして余り外部枠を感じなくなつて来ているのではないかとも考えられる。

もちろん戦前の社会生活の規準枠から解放されても自己をコントロールする力が充分發揮できれば細かな定書のようなものがなくても社会の秩序が保たれたのだとも思ふ。社会の

發展に伴う新しいルールや外部枠による秩序が必要とされることも理解できるが、人間としての真に自己のいのちを生きたるの自覚が見失われてはならないと思ふ。日本人は常になにかの外からの枠組にたよつてのみ自己を律していこうとする傾向が強いようにも思われる。外枠があつてもなくても自己をコントロールできる人間のもつすばらしい力を信頼し、これを育てようとはしない。私は非行少年と呼ばれた青少年たちとの心理治療的人間関係の中で彼らが立ち直つていった体験から、真の自由感を得て自己の生を生きることが自覚されるならばそのことによつて「自然」とでもいいたいような調和の心が覚醒されて結果的には自己コントロールの機能がフルに發揮できるようになると理解して来ている。

ところで幼児たちは生活の大部分を「遊び」を通して自己のいのちを生きつづけている。彼らが遊びに打ち込むときこそ自己の生を生きるということを自覚するときなのである。複雑化する社会の枠に適應するための認識も徐々に一方で必要であると共にまた、それ以前に幼児たちが遊びの中で人間としての真の自己の生を生きる自覚が十分にできるような教育への心くばりが大いに必要だと思ふ。(洗足学園短期大学)



## 牛 島 義 友

《聞き手》 津守房江

津守 きょうは、先生に過去を振り返ってのお話をお聞きしたいと、楽しみにまいりました。と申しますのは、先生はいつも前進的でいらっしやって、過去を振り返ったお話など、うかがったことはありません。お書きになったものもないように思いますので。

牛島 いや、振り返っても何も見えないように、何だけど……。いつ頃から話しましょうか。

津守 まず、生い立ちなどからでも。

牛島 えっ、『幼児の教育』の話じゃないの。(笑)

津守 先生ご自身の生い立ちや、子ども時代のことから、『幼児の教育』の問題にまで展開して、お話しただければと思います。この雑誌が創刊八十一年ということですので、先生のお話からおのずと八十一年の流れが浮んでくるのではないかと思います。

### 子どもの頃

——苦手だったこと——

牛島 まあ、生い立ちから幼児の教育の問題にまでという、間接には私も幼稚園に行ってたということですね。今から七十年前ですね。ちょうどその頃長崎にいたんですよ。長崎のYMCAがありました。そこで、そのキリスト教幼稚園に通いましたよ。まあ



## 児童研究と保育 (3)

二年間ぐらいね。

津守 キリスト教に関係がおりだったのですか。

牛島 ええ、親父が教会の牧師だった。幼稚園では、砂絵のようなもの、あの糊をつけて砂をつける。そんなものとか、だいたい今やっているようなこと、ものを作ることなんか色々ありましたね。スキップなんていうのもありました。あれは苦手でね。(笑)

津守 そうですか。

牛島 あれね、あれは今から考えてみると運動機能がひどく悪かったんですね。スキップが苦手で、少し大きくなって、小学校に行つてからは、木馬(飛び箱)を飛ぶのが苦手なんですよ。飛び越すのに、手をついてから飛ぶという、そういうコントロールがうまくいかないんだ。だからしまいには、手をつかないで飛び越したりしてね。いわゆる「微細脳損傷」という、あれに該当するんですね。

津守 そうでしょうか。

牛島 それで細かい器用な運動は、やっぱり出来ないんですね。絵を描くなんていうのもね、ひどくそんざいなんです、早いですけれど。幼稚園の年齢だったかな、教会の日曜学校で、昔よく形だけ印

刷してあって、盛り上っていて絵の具で塗るようなものを、宣教師がやらせてくれたんですね。それを私がやると、にじんで汚なくて使いものにならないんですよ。(笑)早いのでたくさん塗りつぶしちゃって、妙な顔をされたっていうことを覚えてますよ。

まあ後になって、色々な子どもの指導をするようになって、振り返って見ると、なるほど、自分はいかにタイプだったんだと思うんですよ。原因はよく分らんけど、生れたとき、えらい大きかったと母親が言っていましたね、だいが苦しんだでしょうね。まあ、そりゃあ、こっちが勝手に考えていることであってね……。

津守 先生がご自分でそうとらえていらっしゃるということでしょうね。

牛島 運動機能とそれから言語がね、やつぱりよくないですね。算数と国語とくらべると、算数は好きだったんですよ。国語は嫌いでしたね。その中でも特に嫌いなのは、書き取りなんかですね。字を正確に覚えることが、ひどく苦手だったんですよ。

それに、きれいに書くということもね。あの頃は毛筆で書かされたんですよ。ああいうことは、ひどく苦手ですね。暗記することも苦手です。

そういうものがあるから、子どもの頃は出来ない子どもでした。成績はまあ普通ですね。成績の方から言えば、年齢が上になるに従って、だんだんよくなった。中学校もどうやらはいった。うちの弟なんかは違っていてね、中学の時は一番で入学した。私はそうはいかない。しかし、四年生で高等学校(旧)にはいったわけですが、その頃になると、どうやら追いついてくるわけですね。

津守 旧制中学は五年卒業ですから、四年で高等学校に入学されたのは大変ですねえ。

牛島 福岡の高等学校にはいって、やつぱりいい順位だったわけですよ。一番でなくて二番くらい。あとも同じで、初め悪くてもあとでよくなる。自分の本当の好みに合った、適性に合ったことだけさせれば、わりとまあ出来たんですよ。万能的に何でもうまくいくというところは、出来なかったですね。だからそういう子どもに対して、これは出来ない子どもだなんて見ないで、むしろ将来に完成があると認めていくことが出来たんですよ。そのような指導を考えますね。

### はじめての著作の頃

牛島 それで最後まで今でも一番苦手なのは、字を書かされることね。はじめて本を書いたときなんかね、文章も下手だし、本なんて書けないだろうって、思っていましたよ。波多野(完允)君なんて逆でね、実に巧みに表現出来る。字の下手なのは私に似てたけどね。(笑) はじめて『青年の心理』を書いたのは、だいが年がたってましたけど、もうその頃には波多野君は沢山本を書きましたよ。

私はなかなか筆が進まないで、ごつごつした文章です。それから後になって、いくらか慣れてきてね、割にすら書けるようになったわけですよ。しかし自分で筆

を持って書かせられると、何回も書き直さなきゃいけないし、面倒くさくてしょうがないですね。それで口述の方がいいんですね。家内も協力してくれたし、その他の助手の方も書いてくれました。僕がしゃべることを書いてもらおうと文章になりましたね、あとで修正がいらぬ。まあそれが一種の特技かもしれない。

津守 『青年の心理』は昭和十五年に出版されたのですが、あの頃としては、珍しい研究だったのではありませんか。主観的で、勿論いい意味で主観的なんです。「私の青年期の心理である」といわれていることを、今もはっきりと記憶しています。

牛島 おっしゃる通りなんです、あれは一章の結論が同じところへいくようにして、全体をまとめたんです。

津守 客観的叙述でなく、主観と融合した形がとられていて、今も新鮮ですね。

牛島 私の興味は多方向的で色々な分野に向いました。例えば「農村の心理」をやりました。戦時中でしたけれども、文献

というものは、殆どないです。今でもあまり農村の心理はありませんけれどもね、たまたま家内の親が農学者だったもんでね。当時都会の生活に行き詰って農村へ向う時代でしたから、やったんですね。

それから「女性の心理」も書きました。自分としては冒険だったわけですね。こんなことをやって笑われやしないかという気もあるしね、「妊産婦の心理」をやったときも、研究を発表するまで恥しい気持があったですね。昭和二十一年頃でしたけれど。

津守 そうでしたか。

牛島 それから、家族の問題なんかもありましたが、その頃あまり研究がなかったわけですね。それから後も、新しい分野を転々と移りながら、くるくる回っているような感じですね。児童発達とか精薄の問題の中で、循環しながら色々なことをやったという感じですね。

### 仕事の三つの分野

津守 先生は新しいものをお作りになる

ことが、得意のように思いますが。

牛島 それはね、あの、要するに気が散りやすいんですね。一つことに集中しないで、飛躍する。そういう私の性質が、まあ、人の考えないことを、ひょっと思いつかべたり、早く切り換えたりすることが、そういうことになったかもしれないですね。あまり一つことに集中しないで、転換していく。小さい時から三日坊主って言われてましたね。日記なんか三日つけたらやめてしまおうしね。しかし、だんだん年をとると、三日が少し延びて、三年ぐらいは続くわけですね。一つことで精々十年でしょうが、一生同じ問題をやっていくなんていうのはできません。

津守 本心にエネルギーにお仕事をなさっていらっしやいましたね。

牛島 平行して仕事をしますね。一時に一つではなく、三つぐらい考えてね、同時にやっていく。プランをたてる時には重点的にやって、材料を集める段階では自分がしなくてもよくなってきましたから、今度は他の問題を考える。それからまた、或



うしじま よしとも氏

る程度材料が集まったら他へっていうふう  
に、上手に三つぐらいを一緒にする。それ  
でどうやらある形をとるまでは、一冊の本  
にまとめるぐらいは続くんですね。一応ま  
とめてしまうと、問題がなくなつて、それ  
以上研究を続けることがむづかしくなりま  
す。同じ問題でいくより、違った問題に切  
り換えた方が、はるかに楽に発展するんで  
す。転々としながら、人間の発達というと

ころを中心として  
やるんですよ。

それに私の頃  
は、まだ研究者も  
日本では少なかつ  
たし、未開拓の分  
野がたくさんあつ  
たから、思いつい  
たことをやること  
が出来たんです  
ね。

津守 先生は、

『乳幼児精神発達  
検査』(昭和十一

年、愛育研究所紀要)をはじめとして沢山  
のテストを作っておられますが、それらは  
先ほどお話にありました『青年の心理』『女  
子の心理』などとは全く違うタイプのご研  
究だと思えます。先生ご自身ではどのよう  
に位置づけられていらっしゃいますか。

牛島 ああいうテストや統計的な仕事を  
すると、もの足りないような気になるとい  
うか、それで別のタイプの内面を探究する

仕事をやりたくなるんですね。

津守 そういうことですか。

牛島 私の中には、一つには、青年の心  
理とかのような仕事と、またテストのよう  
な客観的な仕事と、それと実際の場と三つ  
あるんですね。

津守 先生のお仕事の三つの柱、三つの  
分野とでも言いましようか。それは興味深  
いですね。

### 御殿場コロニーへの道

津守 三つの柱の中の一つである実践の  
場について、お話しただきたいと思いま  
す。先生は御殿場に精薄者のコロニーを建  
てられてから、ちょうど今年で二十年にな  
りますね。

牛島 ちょうど二十年前です。どうして  
御殿場コロニーのようなものを作ったんだ  
ろうってことになるけれど、むしろその前  
に、あの子どもたちとの体験があります  
ね。純粹に科学的研究をやるだけじゃなく  
て、やはり子どもの幸せになるようなこと

をやらなくてはならないという気が大きい  
にあるわけですよ。学問は同時に人の生き  
るためにならなくてはならないという考え  
方は、小さい時からの宗教的な教育の成果  
だと思うんですがね。

津守 精薄の子どもたちとの体験は、ど  
んな形でなされたのですか？

牛島 愛育研究所は前から行っておりま  
したけれど、教養部の方を引き受けるよう  
になった。というのは、それまで厚生省と

つもり  
ふさえ氏



文部省の援助でやっていたのが敗戦によっ  
て補助がなくなつて、教養部が壊滅寸前  
になった。それでつぶしちゃいけないとい  
う気が私にあって、引き受けたわけです。  
研究も大事だけれど、教養相談を中心とし  
て、その中から教育実践をやればよいと考  
えた。それで知恵遅れなども診断のしっ  
なしじゃあしうがない。治療や教育もし  
なけりゃあいかんと、精薄幼児の家族指導  
グループを津守(豊)先生とはじめました。

また心理療法を必要とす  
るものには、そういうこ  
とをやるように次々に治  
療室をこしらえていった  
わけです。国の補助がな  
くなって、つぶれようと  
いう時ですから、財政的  
援助はどこからも得られ  
ない。自力で作るよりな  
い。自分で出すといつて  
も結局父兄の協力やなに  
かでやるわけです。愛育  
会からは金はひとつも流

れてこなくて、むしろいつも反対されるわ  
けです。はじめのうちは、児童観察室を使  
つて、仕事は出来ましたが、そのうち場所  
が必要になってくる。建物を作るといふこ  
とは、一番苦しいことですね。まあ、どうや  
ら次々に作り、精薄の幼児のために舟の形  
の建物をこしらえたりしました。そして初  
めて愛育養護学校を作りました。ちゃんと  
正式な認可を取つてね。日本における最初  
の養護学校と言つていいと思います。

この養護学校は小学校だけなんだけれ  
ど、その開所式の時、ある子どものおばあ  
さんが言った言葉が印象的でね。「いま、  
子どもたちに学校が出来たことは嬉しいけ  
れど、この子どもたちが小学校を終える時  
のことを思うと心配でしょうがない」と喜  
びよりも心配の方を言われるんですね。そ  
れでどうしても、こういう子ども福祉教  
育には死ぬまで面倒をみるといふことが必  
要だといふことを強く印象づけられたんで  
すね。なんとかして小学校だけでなく、そ  
の後の施設を作りたい。出来たらコロニー  
まで作りたいと思つたわけです。

作りたいと言っても、愛育会本部では受け入れてくれないわけですよ。きりがないから、小学校以上は他の施設へ行けばいいと言っています。それで自分がやらなければと思ったんです。その頃は精薄施設はあまりなくて、戦前に作られた滝野川学園、藤倉学園とかが残っているだけで、新しいものは殆どなかった時代です。自分で作るしかないって腹を決めましたね、どこに作るうか土地を見て回ったわけです。千葉県山村とか利根川の川ふちとか、方々見ましたが、安心して自分が住みたいような場所がなかなか見つからない。

たまたま御殿場の「青年の家」に行った時、ここなら素晴らしいという印象を受けて、「青年の家」を作るに当って努力した土地の根上さんという女の方に出会って話をしたら、非常に共鳴して下さって「土地を探してあげましょう」ということで御殿場を始められたわけです。

## 家庭的な施設を目ざして

津守 二十年前御殿場コロニーの開所式の先生のご挨拶を聞きまして、私は大変心を打たれました。この子どもたちの一生涯のゆりかごから墓場まで面倒をみるということ、こういう子どもたちだからこそ、物質的に恵まれたよい施設を作ってやりたいとおっしゃいました。今になれば、当り前のことかもしれませんが、その当時は大変なことだったと思います。

牛島 まあ経済的な点でいうと、やっぱり自分でやらなければ仕方がない、僅かですが自分の金を投げ出すというのが簡単ですから、そういうことで決意して始めたわけです。そうすると期待していなかったところから寄付が寄せられたりして最初の施設が出来たんですよ。

津守 国からの補助はあの時全然なかったのですか。

牛島 あの時も、あれから後も、今でもずーっと設備に対する国の援助はないです。

津守 まあ、そうなんですか！

牛島 はじめの頃は福祉法人としてやる

うと思って、書類を持って行ったんですけど、簡単に認可にならないんですね。その理由の一つは、終生施設ということを言ったからなんです。ああいう子どもは、子どものためだけでなく、家庭のため、親のためを考えなければならぬですよ、親は自分らが死んだ後もそこに預けておけば、ちゃんと見てくれるということで安心するんです。けれども法律で定まっている施設は社会復帰を目的とし、いずれは家庭に帰ってもらう。或いは社会に出て就職してもらおうという主旨でなければ、施設にならないわけです。それともう一つは、静岡県御殿場が非常によい場所だから、ボンと作り、小さい時から面倒を見ていた東京の子どもを連れてくる。その事は認可の条件として非常にまずいわけです。東京の子どもを静岡県に連れて来て施設を作られちゃ迷惑なわけです。それで認可にならないかった。当時は認可になったとしても措置費が九千円ぐらいでしたし、あまり得るところはないので、親が自己負担で自由契約で始めました。それから十年ぐらいでやっと

認可になったわけですが、最初の十年は苦しかったです。社会法人になって、国の援助の道が開かれ、また他の団体からの援助も来るようになりました。

津守 はじめて伺った時、富士山を背景に広い原野に建物一つあったのが、その後行くたびに施設がふえていますね。そして、興味深いことに、大きな建物のわきにブロックか何かでちょこっと小さなものがついているんですね。何かと思ったら、あれは職員の家族がふえたから、ちよっと建て増したっていうんですね。子どもたちも職員も、生きた人間が生活するために施設の方を合せていくのだと分りました。

牛島 あそこを作る時に考えたのは、家庭的であるということね。そのことが人間が生きる場として絶対必要だから、収容所ではなくて、出来るだけ家庭的な形で預からなければいけないと考えたわけです。寮長になるような人が夫婦で住み込んで、そこで赤ちゃんも生まれ、入所者たちも、保母さんたちも一緒に住む。そういうのが一つの生活の単位になっている。それをどん

どんふやす形でやってきたのです。家庭寮ですから、家庭内では男女も分けられないし、年とった人も小さい人も分けられない、ずっと一緒にやっていく。従ってあそこの職員は、住み込んで一緒に生活しなけりゃならんですよ。多くの施設では職員は通勤していて、夜は宿直がいるだけです。百人以上の施設でも夜は宿直が二、三人しかいないというのが普通なんですよ。ところがあそこでは全部いるわけです。こういう点は一つの特徴といえましょうね。しかし、今十二、三人が一つのグループになっているので、食事の時なんか二十人ぐらいになりますね、大変賑やかです。賑やかなのはいいけれど、これでは大きすぎる。こんな家庭はありませんよ。もう少し小さくしなけりゃならない。出来たら半減したいというのが今の目標です。

津守 最近「ホーム」というのを作られたと聞きますが……。

牛島 ホームっていうのは、ある程度能力のある人が、そこからよそに働きに行つて自分たちで出来るだけ自由にやれるよう

に家庭に近い形をとるように考えましてみね。ここは五人定員で、五人だけで一つ家に住んでいるわけです。能力のある人たちだから、あまり世話はないんですけれど、夫婦の人が一緒に住んでいます。それであまり騒然としていたので、五人でひっそりして寂しいなんて言っていますが、普通の家庭はこの程度でしょう。だんだんこのくらいのもに変わられたらと思つていきます。

### ゆりかごから天国まで

牛島 コロニーを作る時、はじめからチャベルを作るんだと宣言していたんです。結局十数年かかって、やっと作りました。チャベルを作ると言っても補助は全然ないですよ。それからキリスト教的にやるから父兄の寄付で作ったら怒る人もおろかもしれませんね。ですから全然別の形で作らなければいけませんね。僅かな金かもしれませんが、これはもう非常に大変だったんですよ。

津守 そうでしょね。

牛島 しかしああいう所にチャペルを作ったということが秘かな誇りなんです。どういう意味で誇りかというと経済の問題でなくて、あそこで終生世話をするとやっているわけで、終生ということ、逆に言うとあそこに入った人は、あそこで死んでいくということですから、死んだ時と死んでから後の世話が出来るわけです。死者のために毎日冥福を祈ることが出来るわけです。

津守 富士山を背景に三角形のチャペルがあって、中に入りますと、十字架があって、亡くなった方の名前が銅板に刻まれておりますね。

牛島 普通の教会では、あの名前を残せる人は偉い人で、普通の人は出来ないんでしょうが、あそこに入った人は全部その名前を記録して、冥福を祈るといふ形をとりたいと思っています。お墓のような意味を持つわけですよ。

チャペルがあるために、世話をする態度が違ってきました。普通の病院だったら死

ぬ送世話しますけど、その後は関係ないっていう形ですよ。しかし我々は死んだ時は、あのチャペルでお通夜もし、葬式も出します。死んだ後でもつながりを持つという形がとれるんです。そういう意味で世話をすること自身にも一時的なことじゃなくて最後までということがはつきりしました。

津守 キリスト教式でやることに問題はありませんか。

牛島 大部分はキリスト教でない人がはいつているわけですがね、その場合に希望に従って仏教式で葬式をするつもりです。チャペルではなくて、体育館に祭壇をこしらえてするつもりであります。最近そういう方があったんですが、初めは親類の方が仏式をと言われましたが、後で親の方からの申し出で、チャペルでキリスト教式でして下さいというように変ってるんです。ですから、今まではずっとお葬式も教会でやってますがね強制するわけじゃないんです。強制すると靖国神社になってしまう。

(笑)

津守 はじめに、「ゆりかごから墓場まで」とおっしゃったのが、随分長いことかかって完成したことになりますね。

牛島 あれが出来て、まあどうやら八分ぐらいの出来で、完成に近づいたことになりましたね。

津守 ゆりかごから墓場までというより、ゆりかごから天国までといった方がいいですね。

牛島 そうですね。

津守 先生の生涯の中で一番楽しいお仕事は、御殿場コロニーをお作りになってからのことでしょうか。

牛島 いやー、楽しくはないですね。一番苦しかったですね。(笑)まあそりゃあ、一番苦労したからね。生きがいがあると言った意味ではそうかもしれないけれど、楽じゃなかったですね。今でも楽じゃないけれど、いつもうまくいってるとは限らないんですよ。色々な事が次々ありますからね。生命に関係した問題がありますからね。



## 教育の考え方

牛島 今年は、暮から四人死んでしまつたんですよ。子どもが三人と、職員まで一人事故で死んじゃつてね。みんななしょげちゃってるんですよ。重度の人たちの命の問題は大切だつてことは知っています

が、亡くなる人は重度の人が先というわけじゃないんです。中度ぐらいの人とか、中には今まで問題なくやっていたなんていう人が、ぼつと死んでしまうんですよ。実にあつけなく。心不全なんていう診断になるけれどね。例えばこの間は、会があつて会食をしたんですよ。そこじゃあ元氣よくやつてたわけですが、済んだもんで、食器を持って自分の寮に帰つてね、そこでぼつといけなくなつちやつたんですね。一時間とかかつていないですよ。そういうような死に方が意外に多いんです。だんだん悪くなつて最後に息を引き取つたつていうのは、まだいいですけど、こちらもまさかと思うような時にぼつと亡くなる。天命という

か寿命でしようね。そういうのが大体三十歳台でね。昔は平均寿命は、こういう子の場合二十七歳ぐらいつて言いましたけれど、今でもせいぜい三十何歳ぐらいじゃないかと思うんです。平均ね。

そんなに早く寿命がくることを考えると、一体彼らにはどういふ生活、どういふ教育が一番よいか考えさせられますね。彼らは色々な訓練を受けて、自分の事はでき、少し手伝いが出来るようになるには二十歳になります、二十代になつても職場で働くという事は出来ない。でも社会復帰を目ざして一生懸命教育してるわけですが、本當にちよつと仕事をしただけでおしまいになるわけです。普通教育というのは社会人として必要な基礎的なものを教えたつり、必要技術を教えて、それがすんだら卒業して社会に出て働くことが目標になる。しかしこういう子どもでは、社会に出て働くというところに目標をおいて指導する限り、何十年やつても見込みがないわけです。そういう訓練を受けなければならぬが、それだけでもう死んでしまうような人

たちなんですよ。だからそういう教育はしない方がいいんじゃないかと思つて。厳しくしつけられて訓練を受けても、それが何もならない人のために、何でもかような教育をするのか。社会人を目標としたような教育は意味がないじゃないか。

五十年前のことになりますが、はじめて滝野川学園を見学に行つたんです。そこで大きな体の子ども(大人)たちが、小学校二、三年の国語の教科書を読んで得意になつてゐるんです。それを見て実は無駄な気がしたんですよ。あの人たちはいくら教えたつて新聞を読める程にはならないし、もつと他にすることがあるんじゃないか。農作業なり、体を動かすような訓練をしつりする方がいいように思つて。けれど、そういうことをしないで、小学校のような読み方、算数をやつてね、しかも喜んでやつてるんですよ。あの子どもたちは自分で読めるという喜びを経験して、人の前で読んで聞かせて得意なんです。そういう学ぶ喜びを味わつてゐるから、おそらくいつまでも続いているんだらうと思つて。小

学生の本をよみ、子どもの絵を描いて楽しむその楽しみのために勉強しながら死んでしまってもそれでいいんじゃないかってね。出来上ったものが何であらうとも、そりゃあ立派な絵が描ければそれもいいけれど、そうでなくてもよろしい。そういうような教育ならば、彼らにふさわしいと思われ、本来教育というものはそういう考え方があってよいという気がするんですね。

## 最近のこと

牛島 まあこのごろ生涯教育なんて言われますけれど、ちゃんと社会で働いている人、お前はだめだからもっと勉強しろという腹を立てますよ。そうじゃなくて、とにかく絶えず自分を伸ばし豊かにするために何かやることだと大いにいい。何かのための教育ではなくて、そのこと自身が楽しいからやる。結果はどうでもよろしいという考え方があの子どもたちにふさわしいと思う。

そして同時に私自身のこの頃の生活でも

あるんです。この頃私も勉強しているんですがね、今までの仕事はあまりやりたくないんです。むしろ小さい時に一番苦手だったこと、手を使うことがいいんです。絵を描いたり字を描いたり。と言っても筆でやる気はしないんですけれど。(笑)タイプライターで毎日ラテン語の聖書を少し打って、それから同じところを英語で打って、ラテン語の文法は全然知らないんです。が、そうするとだんだんわかるようになってくる。

津守 子どもの頃手を使うことが苦手とおっしゃいましたが、そのことを今楽しんでやっているといらっしゃるの本当によいですねえ。

II了II

牛島先生の多くの著書・論文の中から、主なものを掲げます。

乳幼児精神発達検査 昭和11年 愛育研究所  
紀要1

青年の心理 昭和15年 巖松堂

女子の心理 昭和18年 巖松堂

幼児語彙検査 昭和18年 愛育研究所紀要2

農村児童の心理 昭和21年 巖松堂

不良化傾向の早期発見 昭和23年 金子書房

教育のための標準検査 昭和24年 金子書房

小学生の心理 昭和27年 巖松堂

結婚生活の心理 昭和29年 牧書院

家族関係の心理 昭和30年 金子書房

西欧と日本の人間形成 昭和36年 金子書房

幼児総合精神検査 昭和36年 国土社

家庭教育と人間形成 昭和39年 国土社

知能判定検査 昭和47年 金子書房

養護と教育の研究(論文集) 昭和47、49年

コロニーへの道(精神薄弱児の治療教育)

シリーズ編著

精神薄弱児の治療教育(上・下)〈同〉シリーズ

ーズ

福祉の哲学と技術〈同〉シリーズ

障害児教育とコミュニケーション〈同〉シリーズ

この子らに何を学ぶか〈同〉シリーズ

以上教育と医学

# 歴史人口学からみた生と死 十一

鬼頭 宏

## 九 ライフ・サイクル

(一)

これまでみてきたさまざまな江戸時代の人口学的特徴を要約すると、短命であること、そして子ども数が多かったことにつぎると言つてよい。それではこのことが、結婚に始まり、子の出生と成長、子の結婚・独立、そして夫または妻の死亡でもって終わるライフ・サイクル(家族周期)に対して、どういうぐあいに反映

していたのだろうか。江戸時代のライフ・サイクルを復元することによつて、家族の一生に現われる現代との相違を明らかにしてみたい。

別表には、江戸時代の農村(二例)と最近のライフ・サイクルのパターンを示してある。いずれも、平均初婚年齢、結婚時の平均余命、平均出生間隔、平均出生日数をもとに導かれたものである。初婚年齢は表にもあるように、湯舟沢村の男二六歳、女二一歳、横内村の男二八歳、女一九歳、現代の男二八歳、女二五歳である。子どもの結婚年齢は、現代は右の数値を用い、江戸時代については実測された子世代の数値を利用してある。出生見数はそ

表 家族周期の重要時点における夫婦の年齢と間隔

時 点	信濃湯舟沢村 (18世紀)			信濃横内村 (18-19世紀)			現 代 日 本 (1978年)		
	夫	妻	間隔	夫	妻	間隔	夫	妻	間隔
1. 結 婚	26.4	20.6	3.1	27.5	19.1	3.4	27.6	25.1	1.1
2. 第1子出生	29.5	23.7		30.9	22.5		28.7	26.2	
3. 末子出生	46.1	40.3	16.6	43.7	35.3	12.8	30.9	28.4	2.2
4. 第1子 結婚	48.5	42.7	2.4	51.3	42.9	7.6	53.8	51.3	22.9
				54.5	48.7		58.4	50.0	
5. 末子結 婚	(65.1)	(59.3)	22.6	64.1	55.7	19.9	56.0	53.5	4.7
				(71.1)	(65.3)		(71.2)	(62.8)	
6. 夫 死 亡	62.6	(56.8)	-8.5	64.4	56.0	-6.8	74.9	72.4	16.4
7. 妻 死 亡	61.4	55.6	-1.2	(69.2)	60.8	4.8	(82.1)	79.6	7.2

(注) カッコ内は平均余命以上に生存した場合の年齢。

(資料) (鬼頭, 1981), (速水, 1933), (厚生省, 1980)。

	湯舟沢村	横内村	現代
(1)子女出生期	一九・七	一六・三	三・三
(2)子女養育期	二七・〇	二七・五	二七・六
(3)脱養育期	△八・五	△六・八	一六・四
(4)全期間	三五・〇	三六・九	五七・三

れぞれ、五人、四人、二人とし、結婚時平均  
 命余は、湯舟沢村男三六・二年、女三五・〇  
 年、横内村男三六・九年、女四一・七年、現  
 代昭和五四年男四七・三年、女五四・五年で  
 ある。

この表をさらにわかりやすくするために、  
 ライフ・サイクルを、(1)結婚から末子出生ま  
 での子女出生期、(2)末子出生から末子結婚ま  
 での子女養育期、(3)末子結婚から夫(妻)死  
 亡までの脱養育期、の三つの局面に分ける  
 と、おのおのの期間の長さ(年数)は次のよ  
 うになる(ただし、ここでは末子を男として  
 計算してある)。

なおライフ・サイクルの歴史的变化の過程をはっきりさせるために、森岡清美（一九七三）によって紹介されている、伊藤秋子が調査した一九三〇年と一九五〇年の結婚コーホートに関する数値も、あわせてつけ加えておこう。

一九三〇年 一九五〇年

- (1) 子女出生期 一四・七 五・〇
- (2) 子女養育期 二五・五 二五・五
- (3) 脱養育期 一・六 一四・五
- (4) 全期間 四一・八 四五・〇

(二)

別表および右にまとめた数値から、江戸時代後半の農民家族のライフ・サイクルについて、次のような特徴をあげることができ

る。  
まず、結婚から夫または妻の死亡までの全期間の長さは、江戸時代には三六・七年、現代よりも二〇年以上短かった。もちろんこの長さは結婚時の平均余命によって決定されている。その伸びにともなって、二十世紀にはいってから、とくに一九五〇年以

降、急速に長期化してきたことがわかる。こうして現代では、江戸時代には稀であった金婚式を祝うことができる夫婦がふえたのである。

次に、全期間の長さが伸びたのとは逆に、結婚から末子出生までの子女出生期が大幅に短縮したことを指摘しなければならぬ。江戸時代には一六―二〇年もあったのが、現在ではその六分の一ほどになってしまった。この変化も二十世紀半ばに、急激に生じている。いうまでもなく、出生児数の減少が原因である。こうして、子女出生期の全期間に対する比率は、現代では六%でしかなくなった。江戸時代にはそれは五〇%前後を占めていて、結婚と出産・育児は分かちがたく結びついていた。

子女養育期の長さにはほとんど変化が見られないのは、右の二期間とは対照的である。この長さが子の結婚年齢によって決められるのに、江戸時代と現代との間で大きな差異がないからである。しかし、成人に達し、社会的に一人前と認められる年齢を、江戸時代には元服とすれば男子で一五歳頃であり、現代については二〇歳、または大学卒業時とすれば二二歳であるから、江戸時代のほうが五年以上短かったともいえる。

子女出生期と養育期を合わせると、江戸時代には四四―四七年で、結婚継続期間をはるかに超えてしまう。江戸時代の夫婦は子

を生み、育てるために一生を費していたのである。現代では、結婚から末子の結婚までは三一年（末子が女子なら二八年）で、結婚期間のほぼ半分にかあたらない。

したがって、次の期間、すなわち子が結婚によって独立し巣立っていったあとの、老夫婦二人だけにもどる期間の歴史的コントラストはきわめて鮮かである。直系家族制をとるならば、後継ぎの息子夫婦に家長権・主婦権を譲り、孫たちに囲まれて過ごす期間、江戸時代の平均的夫婦にはまず与えられていなかった。末子（男子）の結婚は、父母の死亡後に行なわれるのがふつうだった。

さらに指摘しておきたいのは、江戸時代の妻にとって、夫の死亡後、未亡人である期間が現代より短かかったことである。あるいは、湯舟沢村の事例に見られるように、妻の方が先立つことも珍しくはなかった。それは、夫婦の年齢開差が大きかったことと、男女の平均余命が接近しているか、男の方が長かったことと原因がある。

### (三)

ライフ・サイクルにおける近世と現代のちがいは明らかである。それは特に、家族周期の長さ、その中に占める出生期間の

極端な差、そして脱養育期に現われている。そしてライフ・サイクルの変化は、長期間にわたるたびたびの出生から解放された女性にこそ、革命的ともいえる影響を与えることになった。フランスの「女性社会学」者シュルロは、それゆえに、産業革命以後の社会における女性の問題をとりあつかうにさいして、人口学的変化を強調し、これを諸変革の出発点として熱のこもった一章を書いているのである（シュルロー一九七二）。

出生からの解放がなければ、女性の自立や社会的諸分野への進出は困難であろう。古い家族制度や女性の地位・役割に対する古い考えも、それを取巻く人口学的状況と密接に関係していた。このことは当然、ライフ・サイクルの変化が、新しい女性像をつくり出さざるを得ないことを物語っているのである。

また、ライフ・サイクルにおける新旧の対比は、前回にみたような家族組織の相違とあいまって、家族成員間の人間関係にもあい異なる問題をもたらしていたであろう。

たとえば、現代の夫婦は結婚後、ごく短かい期間に子を生みあげてしまうので、親子の年齢開差は小さく、若い父母が多い。また、きょうだい間の年齢差も江戸時代より、ずっと小さくなっている。別表によれば、現代の母親は二六歳で第一子を、二八歳で第二子を生み、三人以上出産する夫婦は僅かではないから、き

ようだいの年齢差は二歳余りで接近している。これに対して江戸時代農村では、母親が四〇歳を過ぎるまで出産を続けることはふつうであったから（第五回）、長子と末子の年齢も一五歳以上離れることになる。

核家族で、年齢のより接近した両親と、年齢のちかきようだいが構成する現代家族（ニュー・ファミリー）が醸す雰囲気と、江戸時代のそれとはかなり異質であることは容易に察しがつく。きょうだい関係についていえば、現代のきょうだいは、遊び相手として、競争相手として、成長過程のうえで相当密接な関係にあるであろう。あるいは、二人きょうだいが同性である場合には、それぞれ一人っ子とかわらないという人さえある。それに対して、年齢が半世代も開いている江戸時代の長子と末子のあいだの関係は、きょうだいというより、保護と被保護の関係が強く、長子は末子にとって父母に代わる役割を演じることが多かったと思われる。湯舟沢村の例をみると、母親が死亡するのは末子がようやく一五歳になるかならないかの頃であり、父親も一六歳の頃に死亡する。そうすると、末子が結婚し、自立するまでの面倒をみるのは、すでに妻帯して同居する惣領の仕事になるであろう。江戸時代のライフ・サイクルのパターンを見て気づくもう一つの点は、現代の重要な社会問題になっている老人の位置や役割に

ついてである。最近、一人暮らし老人や高齢者の世帯が急増したのは、平均余命が伸びたことと、親子二夫婦の同居が一般的でない家族制度へ変化したことに原因がある。もし現代の家族が直系家族制をとるならば、長男夫婦と父母の同居は二〇年ほどになる。さらに母との同居は二五年にも及ぶであろう。江戸時代には僅か六十七年でしかなかった。

江戸時代には、ふつう、親が六〇歳くらいになれば家長権・主婦権が子に譲られて世代交替が行なわれたから（森岡一九七三、鬼頭一九八一）、親子二夫婦の同居がもたらす葛藤は、同居が長期化せざるをえない現代よりも深刻にならなかったのではないかと考えられる。さらに、長男以外の独身のきょうだいも同居する家族構成は複雑な人間関係のもととなっただろうが、むしろ家事労働・生産活動・育児などの面で適当な役割分担も可能であり、老人の存在は重要であったし、「生きがい」を探す必要もなかったにちがいない。

#### (四)

江戸時代のライフ・サイクルの観察から、まだ多くのことが言えるだろう。たとえば「惣領の一五は貧乏の峠、末子の一五は榮華の峠」という俚諺は、江戸時代の農民家族にとって実際にあて

はまることがわかる。長子が一五歳というと父親は四五歳で、下には三、四人の幼いきょうだいがいることになる。農家にとつて、この時期はもっとも労働力が薄手で、生活の苦しい時であつたにちがいない。

このようなことは一九四〇年代まで、農家にとつて実感されていたと思われる（森岡一九七三）。今日では、収入に対する生活費の割合が最も大きくなるのは、長子が大学に在学する頃である。したがって多少の時間的ずれはあるものの、この俚諺はあてはまるものといえよう。しかし、子ども数が減少し、サラリーマン世帯が増加した現在、その実感はさほど強くはないであろう。日常生活におけるこのような諺や家族に対する常識や意識は、長い時間をかけて形づくられてきたものである。一九五〇年以降、急速に変化してきた世帯・家族の構造とライフ・サイクルのパターンに対して、われわれの意識はどの程度変わったのだろうか。今回提示した表を材料に、家族と夫婦のあり方を、もう一度考えていただければ幸いである。

（上智大学）

〔参考文献〕

速水融 一九七三 『近世農村の歴史人口学的研究』 東洋経済

新報社。

鬼頭宏 一九八一 「近世農村における家族形態の周期的変化」

『上智経済論集』二七―二・三。

厚生省編 一九八〇 『人口動態統計・昭和五三年』 厚生統計

協会。

森岡清美 一九七三 『家族周期論』 培風館

シュルロ、エヴリーヌ 一九七二 水田珠枝訳 『変革期の女性』

平凡社。





## 『幼児の教育』戦後篇復刻のお知らせ

既に好評のうちに刊行発売中である『復刻・幼児の教育』

第一期（第一巻～二〇巻）第二期（第二一巻～四四巻）の戦後版に引き続いて、戦後篇の復刻に着手することになりました。

『幼児の教育』は、幼児保育再生の努力の中で、昭和二一年一〇月に復刊されました。生れ変わった同誌は、終戦直後から占領期における保育界の共同機関誌として、大きな役割を果たしました。戦後篇の誌面を彩る記事や論説は、現在に連なる戦後保育史上またとない資料と申せましょう。戦前版に優る愛読をお願い致します。

### 〔体裁・内容〕

全八巻（全七冊）、A5判、クロス装、外函入、

題字・東山魁夷

《第四五巻～五二巻》『幼児の教育』（昭和二年～昭和二年）

※原則として一年分を一冊に合本。（但し第四五巻は

第四六巻を含めて一冊とする）

※各巻平均 五七〇頁

○装幀・造本・製作等全て第一、二期に準じた完全復刻

○解題、年表、総目次、著者別索引を最終巻に収録する。

〔編纂〕 幼児の教育復刻刊行会

〔発行〕 名著刊行会

〔予定価格〕 六〇、〇〇〇円前後 分割払い可能

〔申込・問合わせ先〕 一般書店では扱ってお  
りませんので、必ず左記へ〕

総発売元・株式会社コーディック（童話舎）

東京事務所 千代田区神田神保町三ノ二五 精和ビル

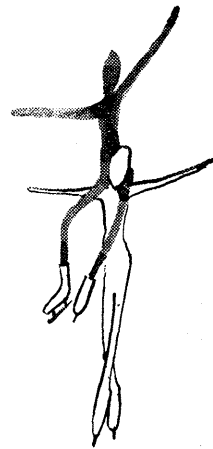
TEL 東京（〇三）二三四―四八〇一

本社 大阪市西区北堀江三一六―二三

TEL 大阪（〇六）五三一―九八〇一

# 私の幼児教育論

——くつ下は誰でもはけるか——



村瀬 隼男

山本五十六海軍大將は、知人への手紙に、当時の学徒兵の父としての気持ちを、「近頃の若い者は、などと申すまじく候」と托しました。近頃の山口大学の学生は、それでも申しております。

「近頃の先輩はダメ、挨拶一つできやしないのだから」。

たしかに近頃の若者は、風呂敷も満尾に結べない上に、エチケットと来たら問題だらけです。「目上」の前をつつ切ったりするのは平気のように見えます。

だからと言って、近頃の若いモンは本当に駄目なのでしょいか。私にはそうは思えません。

先週は津守先生にもお越し頂いて、私共の園も研究発表大会をもつことができましたが、そのあとで、或る新聞社がやって来て、色々話はずんだのはよいとして、結局は、当面する教育上の諸問題の根源を、現在の幼児教育に認めると云わせたいらしいのです。私はそうは思わない、とこたえるよりもさきに不思議なのです。なぜこんな論法がまかり通るのか、がです。

この論法は「時間」の軸で変なのです。ひとは発達してイマが

ある、という当り前のことが忘れられているか、そうでなければ、幼児教育それ自体の発達の事実と可能性が無視されているか、とに角変なのです。

アメリカでは、責任を回避することを「一ドル札を次に手渡す」と表現しますが、大学から高校、中学校、小学校と手渡されて来たお札を、最後にホイと渡されて、さて次を見廻しても持って行き場がなくてオロオロしている、人の好いオニを見る気分です。

今までの話は、自己紹介も込めながら、私はそうは思わない話をあげたのですが、それならどう思うのかと問われても困ってしまいます。気分で言っただけのなら、お札を小学校から大学にまで、つき返してやりたいのです。もともとと教育という名の、同じ仕事をしている商売仲間の筈ですから、「現代教育の諸問題」などと聞き直るから、お互い判らないままお札の廻し合いが始まるので、もっとももっと小さくて、お互いこれなら手が届くという見通しも得られる程の確かで身近な共通問題の領域でなら、これは出来ると思います。そしてその為の技法のうちで一番効果的なものとして、「この子はもう○○○だから」という考えを棄ててみる

ことがあると思います。○○○は幼稚園、小学生、高校三年生とか、年長さんとか大学生とか、です。

私の大学の講義の話を例にひかせて下さい。時間が来て教室に入って行った時、黒板一杯に前の時間の消し残りがあつたときは厭なものです。自分で消していると、益々どうでもよくなります。「こいつら、ポケーと待っている間に、これに気附かぬとは……この高遠な講義も泣くぜ……」などと心中悪態をつきながらの、時間にすれば三十秒かも知れませんが、その日のプランはどこかへとんで、第一、士氣も失われて、「その場に見合った」講義に終始する結果になります。

部屋に戻って来て、コーヒーを飲んでいると学生が相談に来たりします。一杯ついでやって、呑んでそのまま立去る者も時いるのが現状です。夢の大学には遠く、秘書も手伝いもいるわけじやなし、自分で洗うはめになります。あーア、何てこった。こいつら相手に真善美の探求とやらをせにやならんのか、とつぶやく度に、「その場に見合った風」周囲を定義づけることになります。

カニは己が甲らに合わせて穴を掘るといいますが、「その場に

見合つて」ばかり動いていたのでは向上もあり得ません。私は誰と相談する訳にいかず、自分でこの問題を解決せねばなりませんでした。そのために、「近頃の若い者は、凶体は立派になったが、中味はスッポンボンなのだ」という作業仮説を立てました。

まず、「もう大学生だから、これ位は判つてゐる筈だ」などとは決して思わないことです。黒板は、誰か気附いた者が、消しておくべきであることを、臆面もなく、壇上から申します。そして、誰かがきれいにしておいてくれれば、元來が教師はお人好しなのであるから、益々気分をよくして、当人の一二〇%を出して講義するものであるから、授業料の面でも得になるものであることを附加します。更にこれが、各人の生活環境を質的にもり上げ、より高次の自己実現につながる第一歩であることをつけ足します。「三尺退つて師の影を踏まず」は決して古風な思想どころか、そうした合理精神への洞察からなる極めて功利的、近代的な表現であることまでを忘れません。そして講義が終つて、自分できれいに消して退室することも忘れません。

結果——賢者へは一言で足りる。学期初めの五分間は、その後の一年間申し分ない気分を約束してくれるものです。

コーヒーカーップのケースも全く同じです。この人達（このいつら）はも早や出なくなっています）は、今迄ここ数年來、受験王

子様や勉強王女様だったので、コーヒーはだまつて飲むだけのものだつたのだ、と解釈します。洗う練習の場がなかっただけだ。洗つて帰れというのは恥をかかせることになる、と考える方が將來に亘つて不親切なことになる。このまま社会に出したとしよう。出されたコーヒーの後始末をせねばならぬ場合もあることを体験せぬ者に、社会の風はモロに冷く当るかも知れない。その上、本人はどうして自分が周囲とシツクリいかないのかさえ洞察できずに、周囲の風の冷たさばかりをかこつすべしかなくなるかも知れない。

と、まあこう考えて来ますと、こちらが先輩として、教師として、何かが氣になつた時点で即刻、「おい、コップ位洗つて帰れよ」という情報伝達行為をやることの方が、ずっと親切で教育的だ、となるのです。だめだな、話にもならん、とお互いが嘆じ合つていたのでは、なるべき改善もありません、一ドル札の渡し合いのうちに、お互いのイライラからは解放されますまい。

はじめの基盤のない処に、途中からだけの「訓育」を課したのでは、極めてしばしば失敗が伴うことは充分に皆が判つてゐるつもりでも、実情は案外甘いようです。

私の友人に、肢体不自由の子ども達に、くつ下のはかせ方から訓練して、はじめの基盤の構築の確認をしようとしている男がい

ます。ソックスを、最初は手伝って、くるぶしの上まではかせておいて、「さあ、くつ下をはきましょう」とはげますのです。「さあ、ここから伸ばしてごらん」ではないのです。臆面もなく、くつ下をはけるようになりたいと一緒にねがうのです。不自由な手足で、何とかスネの辺までゴムの部分が歪まず伸びるまで、何回でも気長に練習の機会を与えます。できたときには、「ヤア、できたできた！ 上手にはけたね！」と、ここでも臆面もなくほめるのです。

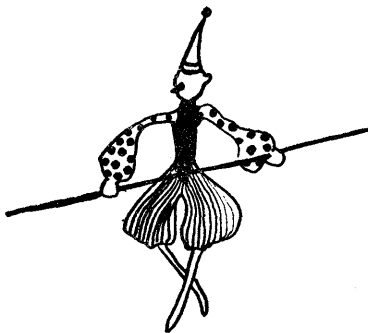
その「単元」が終了すると、次は、もう一段さきの、土ふまずの処まではかせておいて、そこからはカカト越えの練習です。それができて次はつま先から、そして次の単元は、たくったものを手持たせてやることから、そして最終単元は、そこに置いてあるくつ下を自らとってはく、というプログラミングが組まれています。

くつ下が自分ではけるようになった子ども達の喜びと、自我像の変革は、想像を超えたものがあるそうです。

くつ下くらい誰でもはける——この思想が、教育における、元来あり得べからざる「落ちこぼれ」などの珍語の根底にあります。この子はまだ年長組だから左右の概念はでき上っている筈、とか、高二ならもう因数分解できる筈、とかでなく、私達は、た

えず、この子にはどこから与えるべきかを認識することから始めることこそ、幼児教育をその一環とする、教育という私共のいなみの原点であると考えるものです。

(山口大学教育学部 同附属幼稚園長)





## ブリュッゲルの「子供の遊戯」 3

— ブランコ遊びから目隠し鬼ごっこまで —

森 洋子

### 8. ブランコ遊び Schommelen (図1)

仮面遊びをする男の子と同じ二階の部屋で、梁にロープを結び、ブランコ遊びをする女の子の姿がみられる。側で男の子が、その背を押しているが、今にも勢いがつきすぎ、二階から落ちそうである。オランダでは今日でも、打禾場の上の穀倉が、ブランコの最適の場とみなされている。

H・ベットの主張によると、ブランコは多くの未開民族では厳かな宗教的儀式として遂行されたという。バルティック海沿岸の

レットランドの農民たちは、ブランコで高く上れば上るほど、(注1) 麻の丈が高くなると信じていた。もちろん、ブリュッゲルの「ブランコ遊び」にはそうした儀式的意味はなく、単なる春夏の楽しみとして登場しているだけである。

なお、ステラの画(図2)では、二人の童子が一台のブランコに乗っているが、その余白の詩にはこう記されている。

「ブランコは、人が昼も夜も過すことのできる楽しみ。

しかし地面に落ちないように注意なさい。

なぜなら、腕白者がひっくり返り、



図3 T, J. ウェインホーヴェン・ヘンドリックセン「ブランコからの落下」(子供版画シリーズより, 1832—1849年)



図1 ブリュエゲル「ブランコ遊び」(「子供の遊戯」の部分⑧)

その背中がガラスで出来ていたら、そこは碎けるであろうから。<sup>(註2)</sup>  
 事実、十六世紀のオランダのタイル画にブランコからの転落を描写したものがあつた。(図3)。そこには、「この可哀な悪童はブランコから落下する」と記されている。

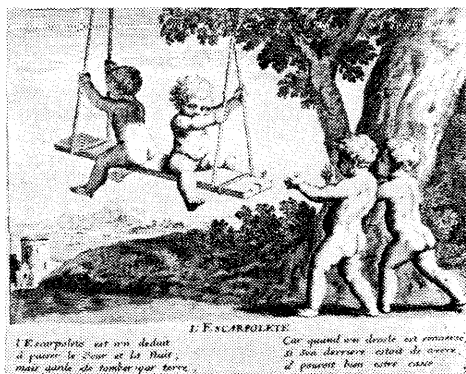


図2 クローディン・ブゾネ・ステラ「ブランコ遊び」(ジャック・ステラ『子供の遊戯と楽しみ』1657年より) 銅版画



図4 ブリュエール「ナッツの穴あけ遊び、またはナッツの風車遊び」（『子供の遊戯』の部分⑨）

9、ナッツの穴あけ遊び、またはナッツ風車遊び  
De Drilhoof of het Notennoleken (図4)

風車の国ネーデルラントに面白い子供の遊びである。テール  
ルの罫りには様々な年齢の男の子が遊びに夢中になっている。そ  
のうちの一人が台の上上がり、ナッツの穴あけとかナッツの風  
車遊びを楽しんでいる。短くなった上衣の下から、白いシャツが  
見えているのも、画家の観察の目をうかがわせる。玩具の作り方  
はナッツの上下に二つ、その中間の脇に穴をあけ、中味をすっか  
りとり出す(図5)。それから真中が細くなった紡錘に紐を結び、

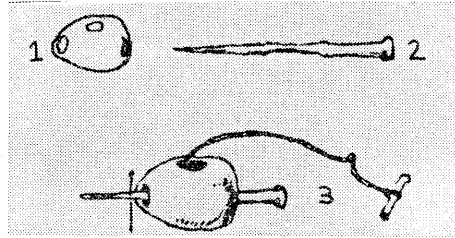


図5 ナッツの風車の作り方(ハルトマン=レンス『おーい、外で遊ぼうよ』)

ガンチュワ物語の第二十二章、ガルガンチュワの遊戯に「風車」  
として列挙されている。

10、シャボン玉 Zeepbellen blazen (図6、7)

頭に三角形の菅帽子すわぼうしを被った青い服の男の子が、シャボン玉遊  
びをしている。空中で吹くのではなく、把手つきの受皿に液体を  
入れ、直接その中でふくらませている点が、日本の遊び方と異な  
るようである。しかしこのやり方は十七世紀においてもポピュラ  
ーだったことが知られる(図8)。この男の子の使うストローが芦

それを下から上の穴に通し、紐  
の方は脇の穴から取り出す。紡  
錘の先が抜けないように、小  
さな横木をつくり、棒の先ぎに  
風車の羽根をつける。遊び方  
は、軸となった紡錘をぐるぐる  
回すと、紐はどんどん棒に巻か  
れる。それからその紐を水平に  
強く引張ると、羽根が一緒に回  
る、という仕組である。

この遊びは、ラブレーのガル



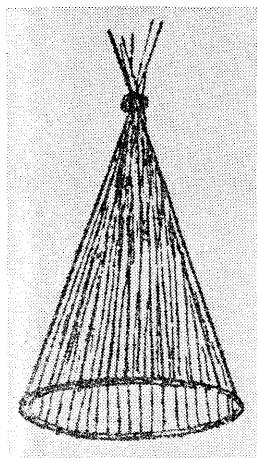


図7 菅帽子 (ハルトマン＝レンス『おーい、外で遊ぼうよ』p.26より)

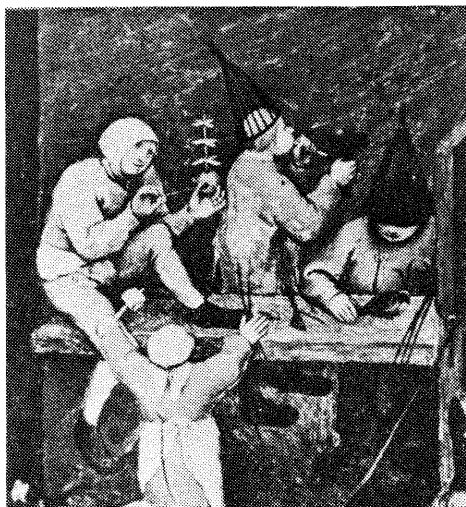


図6 ブリュエール「シャボン玉」  
(『子供の遊戯』の部分①)



図8 E. シリマン「シャボン玉」(カッツ『結婚について』1642年より) 銅版画

か麦わらの菅かは分らないが、かなり太目であり、しかも先を一センチほど十文字に切って使ったらしい。

コックとテールリンク共著『南ネーデルラントの子供の遊戯と楽しみ』によると、オランダ各地で合わせておよそ二十種類の呼び名があるという。<sup>(注3)</sup> 例えば、十七世紀では「泡吹き」といってカッツ(一六二五年)は *Bobbe's blazen*、アモン(一六五七年)は *Blatern blazen* と呼んでいた。

十六世紀の寓意画集に謳われる「シャボン玉」の例に注目してみよう。例えば、アドリアーン・デ・ヨンゲの『メディチ家の寓

意画集』(二五六年)では、「全てをつかまえようとするのは愚かなことだ」という題銘のもとでこう書かれている。

「もし子供が空気の中を飛ぶ風のように軽いシャボン玉を捉えようとすれば、その努力は無駄なことだ。もし人が多くの、様々な研究を志向し、または不確かな榮譽を追い求めるならば、その者は私にとつては子供よりもっと愚かである。」<sup>(注4)</sup>

ほかにダニエル・ハインシュウスの『キュービットの仕事』(一六一五年)でも、「軽いシャボン玉は無から生まれ、玉がでるや否、多くはふたたび失なわれていく。汝が選ぶ人の寵愛というものもこれと同様である……」<sup>(注5)</sup>という風に、教訓の色が濃い。

他方、カッツはかなり教訓的な意味をこめている。

「シャボン玉を吹く子供よ、注意しなさい。

どんなにかそれが驚くべきことか、

ひじょうに大きくふくれた玉もほんの一瞬しか持続しない。

最大限にふかれても、

それは地面に落下してしまふ。」<sup>(注6)</sup>

つまりカッツは一時的な繁栄の後に来る大きな下降を警鐘していた。

またつぎに引用するステラの詩「シャボン瓶」(一六五七年、

図9)には、明らかに大人の世界の争いを比喩的に謳っている。

版画の画面には、一人の童子がシャボン玉を吹くと、他の子供たちが帽子でそれを受けとめたり、またシャボン玉の奪い合いで喧嘩をしている情景がみられる。

「ここでは子供たちが、シャボン瓶をとりあつて、本気で喧嘩する。

まるでそれが金貨であるかのように。

しばしば大人の世界でも、

沢山の本当に些細なことのために、

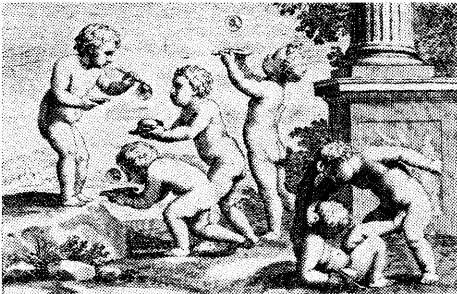


図9 クローディン・ブゾネ・ステラ「シャボン瓶」(ジャック・ステラ『子供の遊戯と楽しみ』1657年より)銅版画

喧嘩が起こるのをみる。<sup>(注7)</sup>

このように、すでにブリュエゲルの同時代、しかもデ・ヨンゲの『メデイチ家の寓意画集』のように、アントウエルベンのクリストフ・プランテイン（本誌五月号、四九―五〇頁参照）で出版された書物の中に、シャボン玉の虚無性を語っている例が見出される。しかし、ブリュエゲルの画面全体を見たとき、この子供の営みにそうした寓意が含まれているかどうか、いずれ後に論述してみたいと思う。

### 11. 小鳥遊び Het Spiel met den Vogel (図10)

薄紫色の服を着た男の子がテーブルに坐り、小鳥に餌を与えている。古くからの習慣によると、この鳥はムーフ鳥らしいが、こ



図10 ブリュエゲル「小鳥遊び」  
「石が脚にあたるぞ」（「子供の遊戯」の部分①③）

の絵では赤い鶏冠がついているので、断定はできない。この画面でも、鳥の足にはおそらく紐が結んであるのであろう。十七世紀の銅版画（図11）をみると、当時、少年たちは小鳥の足に紐をつけ、飛ばして遊んでいた。

十六世紀のドイツの詩人ガイラー・フォン・カイザーベルク『さくろの書』では、少年のこうした行為を詳細に描写している。

「少年が雀をつかまえて、その足に一アーム（腕の長さ）か二、三アームの長さの糸を結んでおく。それから雀を飛び放たせるが、その手に糸をもっている。雀は飛び立ち、遠くに飛去ることができると思うとき、少年はその糸をたぐりよせ、



図11 E. シリマン「小鳥遊び」  
（カット『結婚について』1642年より）銅版画

雀を下へ降ろしてしま<sup>(註8)</sup>う。」

さらに鳥を飛ばす遊びについて、同じくカツは「高くはいけない」という詩でこう書いている。

「遊びに行く男の子は、紐につけた雀を手にしている。

鳥があまりにも遠くへ飛ぶと、

彼はすぐこう叫ぶ。「高くはいけない。」

雀がそれでも行こうとすると、

彼は紐を引張り下ろす。

人間よ。どこへそんなに高くめざすのか。

汝はその欲望の目をどこへ動かすのか。

汝にとって海と野原が広がっていても

各自にはその境界の杭が打たれている。

汝の紐が終ったとき、

どんなに走っても無駄なのだ。

遠くに飛ぶなかれ、至福の人間よ。

汝の棒が届くところまで。<sup>(註9)</sup>

さらにカツは、餌のために人間に飼われている鳥についても

教訓詩を書いている。

「雀は紐から放されても、

また少年の手にもどってくる。

それはわずかな餌のため、

全く鳥は愚かである。

野原で元気に、熱心に餌を探した方がよかったのに。

そこでいくばくかの穀物を探し、

飢えに打ち勝ち、

永遠の奴隷となる紐を恐れる代わりに。

これ以上、何を説明する必要があるか、

私の考えでは、これで十分に云いつくしている。<sup>(註10)</sup>

コックとテールリンクの研究では、少年たちの飼いならす小鳥の種類を列挙している。それらは雀、やまがら、歌鳥（つぐみ科）、椋鳥、かささぎ、鴉、種々の鶯<sup>(註11)</sup>などであった。ラプレーも小鳥の遊びとして「雲雀鳴き」を挙げている。

## 12. ガラガラ遊び De Klater (図12)

赤い服をきた女の子が左手にガラガラ、右手に二本の菅をもつて、テールリンクの前に立っている。昔はおそらく、菅の帽子をかぶった男の子のためのものであろう。ガラガラは、小箱の中に小石とか桃や桜ん坊の種を入れ、棒につけて鳴らすのである。コックとテールリンクの研究によると、当時のこうした小箱は一種の独

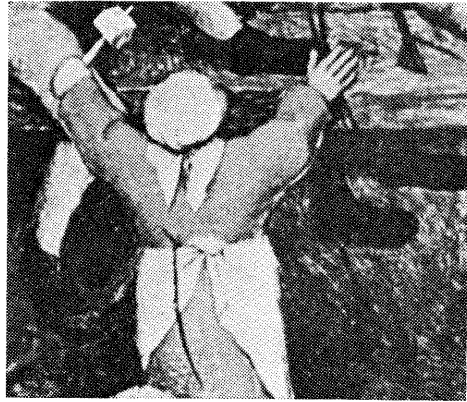


図12 プリュージェル「ガラガラ遊び」(「子供の遊戯」の部分⑫)

楽のような形で、四面体ないし六面体のプリズムから成っている、という。各面には番号があつてあり、拇指と中指で棒を回すと、プリズム面が回り、一番上になった面の番号が、その子の得点になるのである。<sup>(註12)</sup>

### 13、石が脚にあたるぞ Steentjes om het Been (図11)

11番の菅帽子の男の子が坐るテーブルの横に赤い紐が巻かれ、その先端に一個のレンガが結ばれている。この遊び方は、輪にな

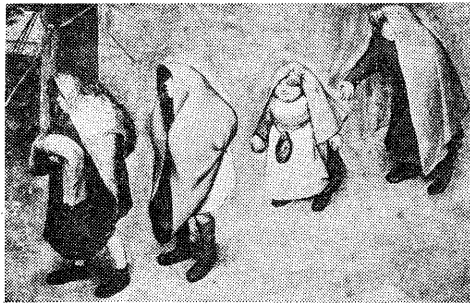


図13 プリュージェル「洗礼ごっこ」(「子供の遊戯」の部分⑭)

った仲間たちの真中で、一人の子供が紐の先をもって、レンガを振り回すと、仲間たちは石が脚にあたらぬように跳び上がる、というものである。

右はド・マイヤーの<sup>(註13)</sup>説明であるが、ハイディンクは、紐で結ばれたレンガは子供たちにとって犬や馬を意味している、と記している。<sup>(註14)</sup>

### 14、洗礼ごっこ De Doop (図13)

四人の女の子たちが洗礼ごっこをしているが、彼らは鷺鳥行進とよばれる一列縦隊の行進をしている。先頭の女の子が人形を青い布でくるんで、大事そうにかかえているが、それは受洗者である乳児をあらゆる悪事から守るという迷信による。彼女と次の女の子の二人は、ヴェールの代わりに長いスカート

をまくって頭にかぶる。下着の白、スカートの裏地の黄色や赤が見られ、色彩的である。他方、後の二人は本物の青いヴェールをかぶっているが、頭上でその一端が結ばれているのは、ずり落ちないためである。

ところで三番目の一番幼い子供は、両手に何かを握っている。ハルトマンとレンスの推定によると、彼女は代母の役をするのであり、古くから洗礼式では式の後、代母（または代父）が子供たちにお菓子を投げ与える習慣があるという。その時は教会での謹厳な雰囲気が突然破られ、子供たちは歓声をあげ、お菓子に群がるという。<sup>(注15)</sup>

なお、ネーデルラントにも該当するかどうか分からないが、ドイツの農村では洗礼に関する種々の迷信がある。サルトリーによると、一般には産婆が洗礼をうける乳児を抱いて教会へ行くが、その時彼女は主要道路を通らなければならないこと（決して脇道とか庭道ではなく）、さらに身内たちは鴛鴦行進をしなければならぬこと、悪魔祓いのためにある特定の色の衣服を着ていなければならぬこと、代父や代母は洗礼式には贈物を持って行き、<sup>(注16)</sup>一定の儀式を行なうことなどである。



図14 ブリュエール「目隠し鬼ごっこ」(「子供の遊戯」の部分⑤)

## 15、目隠し鬼「Blindemannetje」(図14)

左側の家の屏の前で、七人の男女の子供たちが目隠し鬼ごっこをしている。まず数え歌で鬼になった子は、青い布を頭からすっぽりかぶり、目隠しされ、ぐるぐる回されるため、方向感覚を失う。それからゲームが開始する。鬼は輪になった子供たちの真中にいることも、輪の外を廻ることもある。一人が近づき、鬼がその子の名を云い当てたら、鬼を交代する。なお、このブリュエールの遊び方に近いものとして、アドリアーン・ヴァン・デル・ヴェンネの銅版画(部分、図15)がある。

ここでは目隠し鬼が仲間をつかまえようと追いかけている情景が描写されている。

この遊びはすでに古代ギリシャ時代から知られ、ミユイア・カルケ(青銅の蠅)と呼ばれていた。ペーメの



図15 アドリアーン・ヴァン・デル・ヴェンネ  
「目隠し鬼ごっこ」(カッツ『結婚について』1642  
年より)銅版画

説明によると、子供たちは目隠しされた鬼の回りを陽気に声を立てて飛びはねながら、鬼との間にこう対話をする。「わたしは青銅の縄を追う」「そうだよ。君は追いかけるが、つかまえないよ。」  
ネーデルラントでのこの遊びはフランスのコラン・マイヤール Colin Maillard と称される同種の目隠し鬼ごっこに起源がある、ともいわれる。十世紀の頃、戦争の最中、コラン・マイヤールという名の騎士が負傷し、盲目になった。彼の死後、騎士たちがマイヤールの名に因んだ目隠し鬼ごっこを案出し、ひじょうに盛ん

になったということである。この遊びはまたブルボン王朝のアンリーの宮廷においてとくに愛好された。<sup>(注18)</sup>  
またドイツでは「めくら牛」Blinde Kuh と呼ばれ、「めくら牛、お前を連れてってやるよ」「一体どこへ」という歌のやりとりをする。歌の最後では子供たちはめくら牛に「スプーン」を探すように命じ、鬼につかまった子供は「スプーン」といわれ、新しい鬼になる。

英語では「めくらの殴打」Blind-man's Buff (ただし Buff は野牛の意味もあるが、ここでは殴打)とも呼ばれる。ヒエロニム

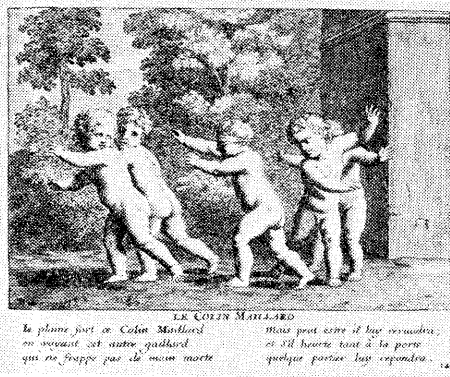


図16 クローディン・ブゾネ・ステラ「目隠し鬼」(ジャック・ステラ『子供の遊戯と楽しみ』1657年より)銅版画

ス・ボス(一四五〇頃—一五一六)の油彩画「聖マルティンの祝祭日」(現在紛失)は、十六世紀後半、タピストリーに織られた。

その図柄は、仕切られた柵の中に豚が放たれ、盲人たちが杖を持って、豚を追うという見せ物を表わしていた。もちろん見物人は盲人たちが豚の代わりに、誤って仲間の盲人を殴打するのを見て興じたのである。ゆえに「めくらの殴打ごっこ」というのは中世のこうした興行にも起源があるかもしれない。

ジャック・ステラの詩の中に、「めくら鬼を打つ」という行為の遊びが書かれている。

「私はもうひとりの悪童を見ると、

めくら鬼めくらおににとても同情する。

あの子は死人の手ではなく、強く打つから。

でもめくら鬼は多分あの子に仕返しをする。

もし扉をどんだたたくならば、

だれか門番が彼に返事をするだろう。」(注19)

なおシンガーはさらに、本来、この「目隠し」という行為に民間伝承的な古い守護霊信仰の名残りがあるので、「と推測している。つまり、恐しい獣のような霊が人をつかまえてくくするため、あるいは霊の悪意ある眼光を覆うために、その霊に目隠しをする」といった意図があったと説明する。<sup>(注20)</sup>しかし、いかにこの

ブリューゲルの「遊び」にそれほど歴史的に深い繋がりがあったとは思えないのである。(続く)

注1 H. Bett, *The Games of Children, their Origin and History*, London 1929, p. 53ff. 同じくヒルソンの古本ギリシヤでは、ブランコが青少年の祝祭の儀式のひとつ、つまり豊穡の祈りと関連するところを指摘している。

Nilsson, *La Religion populaire dans la Grèce antique*.

注2 Jacques Stella, *Les jeux et plaisirs de l'enfance*, Paris

1957 (reprint: *Games and Pastimes of Childhood*, New York 1969), No. 9.

注3 A. De Cock en Is. Teirlinck, *Kinderspel en Kinderlust in Zuid-Nederland*, Ghent 1902-1908, Bd. V, 233ff.

注4 Adriaan de Jonge, *Hadrïani Trois Medici Emblemata* (1565) じつじつ Henkel und Schöne, *Emblemata*, Stuttgart 1967, p. 1316.

注5 Daniel Heinsius, *Het Ambacht van Cupido* (1615) じつじつ Henkel und Schöne, *op. cit.*, p. 1316.



註 9 Cats, *Houwelyck*, Middelburg 1625, "Kinder-Spel".

spiele", p. 1.

註 7 Stella, *op. cit.*, No. 8.

註 8 G. v. Kaiserberg, *Das buch Granatapfel*, Augsburg 1510.

註 9 J. Cats, *Kinder-Spel*, Saint-Omer 1855, p. 78-81.

註 10 *Ibid.*, p. 70-73.

註 11 Coeck en Teirlinck, *op. cit.*, Bd. VI, p. 67-79.

註 12 *Ibid.*, Bd. V, p. 206.

註 13 De Meyere, Victor de Meyere, *De Kinderspelen van Pieter*

*Bruegel den Oude verkleed*, Antwerpen 1941, p. 2-3.

註 14 K. Haiding, *Das Spielbild Pieter Bruegels*, Berlin 1937,

p. 61.

註 15 Hartman et Lens, G. Hartmann en E. Lens, *Héél Jéhl*,

Amsterdam 1976 p. 24.

註 16 P. Sartori, *Sitte und Brauch*, 1. Teil, Leipzig 1910, p.

33-39.

註 17 F. M. Böhme, *Deutsches Kinderlied und Kinderspiel*, Lei-

pzig 1897, p. 418, Nr. 4.

註 18 De Meyere, *op. cit.*, p. 3.

註 19 Stella, *op. cit.*, No. 12.

註 20 S. Singer, *Aufsätze und Vorträge*, "Deutsche Kinder-

## 追記

なお、前、今回に述べた十五の遊びのうち、知人のベルギー人神父 W・A・グローター博士によると、彼がまだ幼かった六十年前に故国で遊んだものがあるという。例えば 1 の「お手玉遊び」は、中が空洞になった鉛か鉄の距骨のイミテーションを使っていた。また 13 の「石が脚にあたるぞ」では、レンガや石ではないが、三十センチ位の棒の先にひもを結び、同じ遊び方をしたところ。さらに 14 の「洗礼ごっこ」では、今日でも代父や代母は洗礼を受ける乳児のプレゼントとして、スプーンとかガラガラの贈物をしたし、洗礼のミサに参列する客たぎに、Dragée とよばれる乳児を型どった砂糖菓子を箱に入れて贈る、という習慣の反映がある。数年前、筆者がベルギーに約十カ月間留学したとき、お菓子屋さんのショーウィンドに飾られた精巧なおくるみ人形のお菓子に驚嘆した思い出がある。(東京工芸大学)

## エリクソンと幼児教育 (5)



仁科 弥生

### 三、移動と性器期 (その一)

三歳も終りのころになると、子どもの歩行はますます自由になり、また力強いものになって、第三の発達段階へと進む。すなわち、子どもは親に依存しないで活発に動きまわるようになる。多少のつまずきや不安を経験しながらも、ありあまるエネルギーを思いのままに駆使してそれら乗り越えていく。その溢れるエネルギーは彼に失敗をすぐに忘れさせ、また好ましいと思われるものへ向って、たとえそれが不確実のことであっても、或は危険なものに見えたとしても、ひるむことなく接近するよう彼をかりたてるのである。また周囲の人々に強い関心をもち、比較をするようになり、何事についても大きな違いに目を向け、とりわけ性差について疲れを知らぬ好奇心を示すようになる。そしてやがて身につけなければならない未来の役割について理解しはじめる。或は少なくともどんな役割が模倣に値するか実利的に理解しはじめるのである。このような幼児期後期の発達段階をエリクソンは「移動と性器期」と名づけている。

この段階の子どもの行動の多くを支配している様式は「侵入的」であるという。たとえば、子どもはその攻撃的なおしゃべり

で他人の耳や心の中に押し入っていく。或は活発な移動でたえず空間を侵す。燃えるような好奇心で未知の世界に踏み込んでいく。そして、男女両性の相違を強く意識するようになるのである。エリクソンは、ここで幼児性器期の舞台、「侵入と包含」の行動様式の最初の舞台がとこのうと考えている。幼児性器性欲は、いうまでもなく未熟な性的発達の状態にとどまる。それは、特別なフラストレーションや特殊な刺激によって早熟的にあらわれる場合は別として、普通は単に何か魅惑を感じさせられる経験という程度にとどまり、それ以上に発展することは稀である。その場合、男の子の性的関心は男根的であり、それは男女両性の性器に集中的に向けられる。それとともに、漠然とした性の衝動を感じはじめるのである。フロイトは、この段階の男の子は最初の性器的な愛着を母親的な大人、つまり自分の世話をしてくれる人物である女性に向け、この母親的な人物を性的に独占する人物に対して最初の性的な競争心を発達させると想定し、そのとき男の子が経験する葛藤をエディプス・コンプレックスと名づけた。女の子の場合、父親や他の重要な意味をもつ男性に愛着を向け、自分の母親に嫉妬するようになる。それはさらに女の子に大きな不安をも引き起こすという。なぜなら、彼女は一方では自分の世話をしてくれる母親を無意識的に大事に思っているため、一層、母親

の存在は魔術性をおびた大きな危険に感じられるからである。近親相姦をタブーとする社会では、事態はさらに複雑である。子どもは、移動の自由が増大し、今や自分は両親と同じくらいに一人前であるという子どもらしい自負心をもつようになるが、性器の領域ではまったく劣っているという明白な事実につきびしい挫折を経験する。そればかりではない。男の子は母親に対する性的関係において、けっして父親に代わることはできないという事実にかがい敗北感を味わうことになる。エリクソンは、こうしてもたらされる深刻な衝撃とそれに伴う魔術的な恐怖が、フロイトのいうエディプス・コンプレックスの概念の背景にあると考えている。そして、エリクソンは、女の子の場合、この段階で宿命的な経験をするといい。すなわち、女の子の移動的、心理社会的侵入性は男の子と同じように増大するが、同時に彼女は男女の性器の違いを決定的なものとして理解することになる。男の子の場合、目に見える器官があつて、それに大人になる夢を結びつけることができる。しかし女の子の場合には、性的に男子と同等であるという夢を託すことのできるそれはない。彼女の胸もまだ未来を示さずしるしとしての乳房をもっていないからである。そして、やがて女の子は、幼いものの世話をするなど女性的摂取と母性的包含という基本的行動様式を発達させるとともに、強要的になったり、

握り屋的になったり、或は過度に依存する幼稚性を示したりするようになるという。この「撰取」と「包含」の様式は、口唇と感覺の段階で発達した「取り入れ」様式への部分的な逆行のように見える。この点について、エリクソンは、女性の性器の様式が口唇の様式に近似している事実を指摘し、身体の解剖学的構造と心理との間に対応関係のあることを示唆している。さらに彼は、この段階ですで見られる性差は、男子がより活発な筋肉的生活に進む可能性をもつことに対して、女子はより豊かな感覺的弁別力をもつ可能性や、未来の母親としての繊細な感覺や受容的な特性をもっていることを暗示するものと解している。これらの見解は、男女の心理学的性差があらわれてくる過程を説明するものとして大変説得力のあるものと思われるが、性差の発達過程に関するエリクソンの考え方については回を改めて取り上げたいと思う。

次に、この段階では、男女両性の基本的な社会的行動様式に、「獲得するチャンス逃さなご」(“being on the make”)という意味の「ものにする」(“making”)という様式が加わると考えられている。「ものにする」という言葉には、正面攻撃、競争の楽しみ、目標達成への執念、征服の喜びなどが含まれている。男の子の場合には、正面攻撃によって相手をものにするというよう

うに、男根―侵入の様式によって「ものにする」傾向が強調されつつける。女の子の場合には、もっとおだやかな形で、たとえば自分を人目につくようにしたり、可愛い女に見せたりして、相手を誘惑し、ものにしていく傾向に変わっていく。このようにして、子どもは目標を選択し、これらの目標に近づくために忍耐するということを学んでいく。これが自発性の必要条件であるという。

さて、この発達段階の課題として、エリクソンは自発性対罪悪感をあげている。歩けるようになった子どもは、前段階で自律性対恥・疑惑という発達課題を肯定的な形で解決すると、自分について肯定的な感覺を強めてこの段階へと進んでくる。子どもは強い好奇心を外的環境の探索に向ける。前段階で自分の中に見いだしたような安定性や規則性を外界にも見いだそうとしているのである。その好奇心は物理的なものから形而上学的なものにまで広がっていく。環境に対するこの積極的探索をエリクソンは自発性と呼んでいる。ニューマンらは、先の自律性が環境に対する積極的な身体的探索であったとすれば、自発性は世界に対する積極的な概念的探索であると位置づけている。この場合注目すべきことは、環境を探索する際の動機や能力が自律性という強い感覺の発達に依存しているということである。子どもは自分自身を統制す

る能力に自信をもったとき、はじめて積極的にさまざまな活動に取り組むことができるのである。さらにこの幼児期の好奇心や探索欲求が、青年期においていかに生きるべきかという人生の目標についての思索へと発展するための基礎となるということである。

この段階における危険は、子どもが新しく獲得した運動能力と知的能力とを心ゆくまで楽しむとすると、自分の計画した目標や実行した行為に関して罪悪感を抱くことであると考えられている。すなわち、彼の積極的な活動は、やがて彼の身体や精神の実行力をはるかに越えるようになり、その結果、自分が意図した自発性に自ら強力な停止を命じることを余儀なくされるからである。また、どの文化でも、子どもの探索欲求の充足に対して何らかの制限を設けている。ある種の質問は許されないとか、ある種の行動はしてはいけないなどである。たとえば、子どもが自分の身体や友だちの身体に興味をもって詮索をすることは探索欲求の一つのあらわれである。ところが、とくに性器についての好奇心などに対しては大人が当惑を感じたら、不快感を示したりするので、子どもは何を悪いことをしたと罪意識をもってしまうのである。そして、子どもは、親の当惑や不快感を避けるために、ある領域の詮索を抑圧しなければならないことを学ぶ。実はこのよ

うにして、子どもはさまざまな文化的禁止を徐々に理解し、タブーになっている事柄に対する好奇心を抑えることを学んでいく。またタブー領域の侵犯が起ころうになると、ちょうど警告を与えるように罪悪感が頭をもたげ、子どもの行動を制約するのである。先にも触れたが、多くの文化が共有しているタブーの一つに近親相姦の禁止がある。したがって、エディプス期にある幼児は、生物学的にいつても性的に不完全であるために、彼のエディプスの願望は攻撃的な空想となり、その結果、子どもは深い罪悪感におそわれるのである。また、性器の興奮と結びついた空想に対する罰として性器を失うことへの不安（女の子の場合は、自分ですでに失ってしまったのだという確信）を抱く。精神分析理論は、ここですべてが結合して、人間特有の危機を招来すると仮定する。そしてその危機の中で、同性の親との同一化という過程をへて超自我が形成され、親の価値観や道徳的規範が子どものパーソナリティの中にとり入れられ、やがて子どもは親に対する前性器期的な愛着から卒業すると考えられている。自発性と罪悪感という課題の解決にあたって重要な役割を果たす同一化の過程と道徳性の発達については次回でくわしく触れてみたい。

さらに、エリクソンによれば、自発性対罪悪感という心理社会的危機の肯定的解決は、環境に対する積極的な認知的探索がいろ

いろいろな情報をもたらしてくれる楽しい経験であるという感覚を子どもにも発達させるといふ。いうまでもなく、この探索欲求の発達の上に子どもの知的教育は考えられなければならない。子どもが知りたい、やってみたいと思う自発的な興味に即さない限り、文字や数の学習の効果もあげるとはむづかしいのである。そしてこの危機が否定的に解決されると、子どもの心に強い罪悪感の感覚がつくり上げられるという。たとえば、子どもの質問や探索に対して親がきびしい態度でそれらを制限すると、子どもは自分の周囲の世界に対する疑問や好奇心をすべて両親への侵犯であると感じさせられてしまう。子どもの質問は、部分的な真実、不適切な説明、無関心などであしらわれることもある。その結果、好奇心そのものがタブーであると思われ、何かに興味をもつことが罪であるとさえ感じるようになる。このように、危機を否定的に解決した子どもは、自分の内的な能力や想像力や感覚能力に応じた行動を自らすすんでとることができず、両親やその他の者に全面的に依存するようになるという。ちなみに、母親の態度と子どもの知的発達について三歳八ヶ月から小学校入学直前の六歳までの幼児を対象にして日米比較調査を行なった東、柏木の研究の中に、これらの関係についての実証的報告があるので、その一部分をここで紹介しておこう。まず、面接によって母親の教育

観、しつけ態度と子どもの知的発達を調査した結果をみると、就学前に文字や数を教えることが重要だとする意見は子どもの知的発達にマイナスの関係をもつことが報告されている。これに対して就学前に社会性や言葉の意味や話し方を身につけることを重視する意見が知的発達と日米ともほぼプラスの相関の傾向にあったことが明らかにされている。このように、文字や数といった学校での課業に直結する技術を就学前に覚えることを重視する親の態度が子どもの知的発達とむしろマイナスに結びついているということは、文字や数といった技術の習得以前に、自発的な探索や遊び、友だちとの協力などの経験を通過しての子どもの全般的な認知、社会的発達が大切であり、それが前提となつて知的発達はすめられることを実証していると思われる。また、自由遊び場面における母親の子どもに対する働きかけと子どもの行動特徴との関連を調査した結果には、子どもの自発的な関心や活動を重んじ、母親はそれを側面から激励、援助するという間接的働きかけの指標である「配慮」「賞賛」は「独創性」「活動性」「持続性」といった望ましい行動特徴とはプラス、「衝動性」「依存性」といった望ましくない特徴とはマイナスの相関が見いだされている。他方、母親主導の直接的働きかけの指標である「構造化」「圧力」「おしつけ」「統制」は「衝動性」「依存性」とはプラス、「独創性」

「活動性」とはマイナスに相関している。そしてこのパターンは日米間で基本的にはほぼ等しいと報告されている。このことは、母親が自由遊び場面で、子どもの活動に深く関与し、統制し圧力をかけてリードして行こうとするほど、子どもは母親に依存的になり独創的、自発的に活動する欲求は抑えられてしまうことを示唆している。そして子どもの自発的な関心や活動を見守り、はげますような母親の態度が子どもの探索欲求を強化し、子どもの活動を活発にさせ、持続性のある独創的な活動を促進することがうかがわれるのである。さらに、日米の母親の教育観、しつけ観について、質問紙法によってえた回答の中で、自発性、内発的動機づけ、自尊などを重視する意見を示す選択肢の回答には日米差はみられなかったと報告されている。大変喜ばしいことであると思うと同時に、回答傾向が全般に日米きわめて類似していたという結果に、日本の幼児教育が欧米の教育思想に大きく影響されている事実は今さらながら驚かされるのである。

話をエリクソンの理論にもとそう。彼はこの発達段階の徳目として「目的性」をあげている。人が「意志」の芽を時間をかけて育てなければならぬのと同様に、子どもには、仮の方向づけをしたり、欲しいものに注意や活動を集中させたり、或は意味のない空想にふけったりして、「目的性」の萌芽と戯れることが必要

であるという。子どもとって遊びとは、大人の思考や計画と同じように、試行の世界である。そこではさまざまな条件が単純化され、いろいろな方法が試みられる。子どもはたびたび姿を変え、主題を繰り返し演じる中で、あるときは過去の失敗を吟味し、あるときは期待を確かめることができる。また未来を予想し、やがて自分の計画をもちはじめ。或はやらねばならないいろいろな役割や来るべき現実の目的を学びとるのである。幼児期の遊びは、いわば中間的現実を子どもに提供しているのである。この遊びがもつとも盛んになる時期が、幼児期性欲が、人間にとって最大の障壁である「近親相姦のタブー」に遭遇する時期であるということは重要であるという。なぜなら、子どもの性的衝動と目的的なエネルギーは、はじめは感覚的喜びやさまざまな性的空想などをめぐんでくれた両親に向けられるが、やがて遊びを通して現実的な目的物へと向けられていくからである。この場合、親は、どこで遊びが終り、繰り返しのできない一回限りの目的性がどこで始まるかを子どもに示さなければならぬ。また、空想がもはやそれほど自由には許されず、学びとるべき現実が一層強く追っていることを教えなければならないという。これらの両親の声とイメージが子どもの心に内在化され、やがて許される行為や思いを明確に示す一貫した内なる声として子どもの活発な良心の

發達に影響を与えることになるからである。そしてこの良心の發達によって、子どもは何が遊びで、何が空想であり、何が二度と繰り返すことのできないことであるかを識別していく。さらに重要なことは、家族的目的追求や経済的目的追求という目標のもとに目的的に統合されている家族を一つの倫理的な例証として子どもが良心の中に取り入れていくということである。そこで「目的性」とは、子どもが空想の挫折や罪悪感や或は罰を受けるかもしれないという不安にも打ちかって、価値ある目的を心に描き、実際にそれを追求する勇氣であるとエリクソンは定義している。そしてそれは家族を手本として生まれ、またすべての行為の原型となるという。したがって、幼児といえども家族の一員として能力にみあった役割を分担し、責任を果たすという経験は大切な意味をもつのである。しかし、遊び戯れる子どもとして出発した人間は、たとえ最高の目的に生きていると感じているときでも、その行為の中に遊び的、役割的な名残りをとどめているという指摘もなされている。われわれはそこにエリクソンの鋭い洞察を読みとることが出来る。

子どもの發達を眺めてみると、この時期ほど、学ぶことに積極的で、かつ学習が急速に進む時期はない。それは、發達における自発的な側面を一貫して強調するピアジェの理論によっても指

摘されている。また、義務やその履行を分担しあうという点でも、もっとも成長する時期でもある。それだけに、彼らはものを仲間と共同で作ることに熱心であり、またそれが出来る。遊びを構成したり、計画したりする目的で他の子どもたちと協力することを好み、またそれが可能である。幼稚園や保育園では教師たちから喜んで学ぼうとし、理想の手本をすすんで模倣する努力をする。そして、幼児期の葛藤やエディプスのな罪悪感をあまり経験せずに自発性が行使できる機会を大人の仕事との同一化を通して求めようとする。その上、エディプスの段階は、許されることの範囲を限定する道德観を子どもの中に重苦しいまでに確立させるだけではない。その秘められた罪悪感は、同時に、自発性や強い好奇心を、望ましい理想や現実的な当面の目標に向かわせるのに役立つのである。それは、また可能なことや実体的なものへ目を向けさせ、事実について学ぶ知識の世界へ子どもを導く。また、他人を「利用し、ものにする」のではなくて、ものを作る方向へと子どもを向かわせ、幼児期の夢が現実的な大人の生活目標に結びつくことを可能にするのである。したがって、この段階の後期には、子どもは、興味の方向がはっきりしてきて、ものを作る意欲に燃えて知識や技術を熱心に学びとらうとするようになる。



こうして、幼児期後期の子どもは、自発性対罪悪感という発達課題を解決すると、目的性という徳目に支えられて、次の発達段階へと進んでいく。その学童期をエリクソンは、子どもが正面から人をおそって「ものにする」要求を昇華させて、いろいろなものを生産することによって周囲の人々の承認を獲得することを学ぶ時期であるととらえている。そしてこの時期にすべての文化は生活技術を子どもに習得させようとする。子どもたちは何らかの形で組織的な教育を受けるようになる。エリクソンは、必ずしも専門の教師を中心とする学校だけでそれを受けるとは限らないと言っている。学校とは無関係の周囲の大人から、そしておそらくもっとも多くのことを年上の兄弟や仲間から子どもは学ぶという。また周囲の大人や兄弟が使ういろいろな道具を子どもが上手に扱うことができるようになる過程で生活技術を、そして文化の生産技術の基本を学ぶという。また、子どもはこれらの技術の習得や仕事にすすんで身を入れるようになり、「勤勉」の感覚を発達させると考えられている。エリクソンのこれらの記述は、それらがかつてのわれわれの家庭生活の描写と近似していることをわれわれに気づかせる。今日の日本ではこのような家庭の役割があるそかにされているというのが現状のように思われる。子どもは

のびのびと遊ぶこともなく、かといって家事を手伝うことも少な

いといわれる。子どもの仕事といえは机の前で勉強することだけで、しかも勉強がすべてに優先するという一部の風潮に対して反省をせまる声も聞かれる。教育のあるべき姿とは何であるかを問い直すわれわれの今日的課題の解決のために、エリクソンの理論は格好の手がかりを与えてくれるのではないだろうか。

(津田塾大学)

#### 参考文献

- 1 Erikson, E. H., *Childhood and Society*. New York: W. W. Norton, 1963, 1st ed., 1950. (仁科弥生訳『幼児期と社会』みすず書房 一九七七)
- 2 Erikson, E. H., "Identity and the Life Cycle: Selected Papers," *Psychol. Issues (Monogr.)*, Vol. 1, No. 1, 1959. New York: International Universities Press. (小此木啓吾訳編『自我同一性』誠信書房 一九七三)
- 3 Erikson, E. H., *Insight and Responsibility*. New York: W. W. Norton, 1964. (鎌幹八郎訳『洞察と責任』誠信書房 一九七二)
- 4 Evans, R. I. 『エリクソンとの対話』岡堂、中國訳 北望社 一九七一
- 5 藤永保編『児童心理学』有斐閣 一九七三
- 6 Newman, B. M., and Newman, P. R., 『生涯発達心理学』福富、伊藤訳 川島書店 一九八〇
- 7 東、柏木、ヘス『母親の態度・行動と子どもの知的発達—日米比較研究』東京大学出版会 一九八一
- 8 Piaget, J., 『思考の心理学』滝沢武久訳 みすず書房 一九六八

## 子どもとの出会いの中で学ぶこと ⑥

水 沼 昭 子

「おはよう、せんせい……」子供達はそのときどきの喜びや発見、そして幼ない悩みをいっぱいもって毎朝登園してくる。ある時は、季節を告げる道端の小花だったり、たあいなき、しかしその子にとっては宝物の石だったり、虫や小鳥の落した羽根、ほったの涙だったり、さまざまである。そうした物や事柄を私達は「おはよう」のあいさつと共に、しっかりと受けとめようとする。

六月も終わろうとしているある日、ほとんどの子供が登園し、自分の遊びをみつつけようとしたり、自分の今日の「場」をさがす朝の、なんとなく動きの多いひととき、年長組のY子を囲んで数人の子供達が私のところへやってきた。Y子の手には小さなボール箱が大事そうに抱えられている。そのうしろから担任のA先生が少し困った表情で「先生、お話があるんですけど……」とついできた。

「Yちゃん何かご用？」と迎えた私の前に、Y子は大事そうに小箱を差し出した。受けとろうとして私は「ドキリ」とした。なんと、細いけれど、たしかにとぐるを巻いた蛇が入っているのではないか。保育者として落第だとお叱りを受けるかもしれないが本当に「ドキリ」とした。しかし、何気なく（——と心掛けながら）Y子の気持を受けとめようと話を聞いてみた。「あのね、ミイから借りて来たの。ミイって、ホラ、うちの小さい猫。まえに、せんせいに話をした、あのミイ。今日の朝、蛇つかまえて来たの。そしてふざけてたら蛇、死んじゃったんだよ。だから借りて来たの。ミイに——」  
「おうちへ帰ったら返すんだ、ミイと約束して来たの」一息に話すとY子は終りにこう言った。「ミイはこの蛇を食べちゃうよ、きつと」——私の心の中は咄嗟のことに混乱した。A先生の困った表情が私の思いに重なった。「A先生も、水

沼先生もどうしたんだろう、いつもとすこし違う……」Y子の表情は、「何か困った事を自分ではしているのかナ」と私へ問いかけている様だ。Y子を取り巻いた子供達は「すごい」「うごくの?」「カッコいい」「いやだー」と口々にいいながら、いかにも興味深げに見守っている。

ふと前日、Y子と昼食をしながらのおしゃべりを思い出した。今、Y子にとって、小猫のミィの繰広げる世界が一番の関心事のようだ。「せんせ、きのうネ、ミィがことりをつかまえてきたの。いたずらして食べそうになったらパパがネ、コラっておこつて、ことりがしたんだ——」Y子の昨日の話題を思い出して私はY子に話をした。「きのう、小鳥を逃がしてあげたのに、蛇は逃してあげないの?」Y子は当然といった表情になった。「だって、ミィはすぐくたいへんだつたよ。へびがあつちこつち、いっばいうごくから、ミィはがんばったんだよ」答えながら、「どうして先生わかんないの」といいたげなY子。そうしたY子を受けとめてやれない私の表情も、きつと、その場に居合せた子供達にとって「いつもの先生と違うぞ」と映っているに違いない。小さいY子の手にある小箱。そして、とぐろを巻いた小さな蛇。困った表情の私——そこだけが真空状態の様な朝のひとときであった。「死んじゃった蛇は逃げられないから、かわいそう。こんな箱の中いやって思っても動けないし、みんなに見られる

のいやつて、逃げられないから、おもちゃみたいに持って歩くのは困るナ、先生、あずかっていい?」精一杯の私の提案に「帰りに返してね。ミィに約束したんだから……」納得しかねるといった表情でY子は私に小箱を渡した。

この日の出来事から保育者としての私に重い問いが残されている。Y子の気持をわかってやろうとしたのか。死んだへびなんかもって来て——と云う思いはなかったのか。小猫が食べるなんて……。たしかにY子はユニークな面を持つ子だ。反面ごくあたり前の事柄に無関心な面があつて教師会でも話し合われる子ではある。けれど「Y子らしい出来事」で終つてはいけない。「問」を私の心に残した。「死んだ蛇を神様にお返ししましょう」などとの安易な解決をしようとは思わなかったが……。数日後「せんせい、へびきらいなんだね、だって、あんなにおこつたもの……」Y子のこの言葉に心を刺された。何気なくふるまっていたつもり、おだやかにしていたつもり……そうした表面の私ではなく、内面の私の混乱を、気持を敏感に受けとめている子供の心の眼に、改めて保育者としての私が問われたと思つた。

自分が広げて迎え入れようとしている両手の、広さがいかに自己満足なものであつたかと思つた。あの時、どうすれば良かったのか……を毎日の子供との生活の中で問いつづけたと思つた。

(千葉・愛隣幼稚園)

## 構造を把握する力の弱い子どものための家庭内治療

——現代の生んだ情緒障害児——

J・F・W・コック

国吉栄 訳

きょうは皆さんに、私がオランダでみている子どもたちについてお話ししましょう。

### 子どもと世界

私たちは世界と関係をもって生きていくわけですが、そのためには世界の諸構造を分析することがまず必要です。世界は構造から成っているからです。例えば今ここにも、私が話し、皆さんが聴き、私が皆さんを見、皆さんが私を見る、という構造がありますね。私がきょう皆さんにお話しするのは、このような様々な構造を把握する力が弱い子どもたちについてなのですが、近年、そういう子どもたちが増えているように思われます。

世界の構造を分析するためには、それらが持っている一つ一つの特徴を見分けることが必要です。そのためには認知的な分析力と、諸構造に対応しうる柔軟性がなければなりません。幼い子どもは世界の諸構造に出会うとそこから何かを受け取って、本質的な成長をします。例えば諸構造の一つである言語と出会う時、子どもは単に言葉を覚えるだけでなく、機能的な意味でも成長する

でしょう。皆さんが大学で勉強をする時、学問の内容を受け取るのと同時に、考えることを学び、また分析することを学んでいるのです。それが皆さんの機能的な成長です。子どももまた、世界を分析することによって二重に成長していきます。子どもはそれによってより備えられて、再び世界と出会うのです。私はそれを螺旋状の発達と呼んでいます。

人間の発達には教育のおかげで可能になります。子どもが幼い時には家庭での養育、そして後にはどこか他の場所での教育に依存しているのです。幼い子どもは、養育者に十分に世話をしてもらえず、様々な構造を与えてもらえないと、回復しがたく損われてしまうでしょう。子どもは世界と関係をもって生きており、世界は関係の中に存在しています。社会の構造、言語の構造、時間・空間の構造など、私たちは常にあらゆる種類の構造と出会っています。そして、それらの構造は常に分析されなければならぬものなのです。

けれども、ただ構造を分析するだけでなく、それらを理解することがなければなりません。子どもは諸構造を受け入れ、それと同化する必要があります。例えば言葉話す自閉的な子どもの場合を考えてみましょう。その子どもは自分の言語を持ってはいませんが、彼の語るセンテンスは私たちには意味をなさないので

す。それは私が、私たちの文化が共有している言語を分析しはするけれども、それを理解し、受け入れ、それと同化することをしないからなのです。子どもが構造を受け入れる時、彼の自己概念は成長し、創造的になり、そして少しずつ自由になっていきます。子どもは世界の中にすでに存在しているものを受け入れ、それに従わなければならないのですが、それに対するプレミアムとして、自己概念・創造性・自由を獲得するのです。私はもちろん、感情という関係の存在を否定するものではありません。子どもが両親から愛されているということは事実です。しかし感情の関係だけが存在しているのではなく、この認識の関係が存在していると考えています。

### 構造を把握する力が弱い子ども

さてここで、構造を把握する力の弱い子どもの輪郭を二つの角度から描いてみましょう。

まずネガティブな基準として、第一に根本的な情緒問題はないということですが、なぜそう考えるかと申しますと、それまでの生育過程や実際の環境での機能の仕方などから、情緒問題が関係しているとは考えられないこと、家庭でも学校でも、また心理テス

トなどでも、情緒障害のある子どものような反応をしないこと、さらには、投射テストでも情緒問題の存在を示すような結果が出て来ないなどのことからです。

二番目としては脳障害や、他の身体的な問題がみられないことです。小児科医や神経学者もそれらの問題を発見しておりませんし、微細脳損傷さえ見つかりません。未成熟であるとはいへ、脳波も正常です。

三番目は、問題がごく早い時期には現れないことです。幼児期のはじめは比較的正常的な発達をし、幼稚園に入園する頃に初めて問題が生じてきます。

四番目としては舞踏症やアトピーのような不随意運動はみられないこと、五番目に、精神症的な徴候はないことが挙げられます。

次にポジティブな基準としては、第一に総合的に年齢に比して未成熟であるということが挙げられます。幼稚園や学校の教師からは、行動や興味が幼ないという意見が寄せられますが、心理テストやプレイルームでの遊びを通して、パーソナリティーと感情の成熟に発達の遅れが観察されています。また、社会性も未成熟で、その根底には認知能力が十分でないということがあるようです。行動観察やテストによれば、社会的な状況を分析し、それ

らを秩序だて、さらに次のものを予期する能力に関して、二、三年の発達の遅れがみられます。

また、先ほど、根本的な情緒問題はないと申し上げましたが、子どもが大きくなるに従って、二次的に情緒の面にも問題が生じてきます。さらに、知覚が非常に拡散的であるということもできます。自分が存在している世界から十分に意味を受け取ることができないのです。集中力に問題があるということもできるでしょう。

けれどもやはりそう子どもたちも大人が好きでなし、大人と遊ぶことが好きなのです。そして、そういう子どもを持つ両親たちが助けを求めて、私どもの相談所を訪れてくるのです。

### 教育するということ

さて、皆さん、ここで御自分の受けてきた教育を振り返ってみて下さい。幼稚園時代、小学校、中学校時代を振りかえってみると、皆さんが今、ここにいらっしやるように成長してこられたのは、決して皆さんの御両親の何か意図を持った行動によるのではないことに気づかれるのではないのでしょうか。かえって、御両親の意図的な行動があったにもかかわらず、このようなすばらしい

大人に育ってこられたと言えるのではないでしょうか。私は、教育とは単なる意図的な行動の寄せ集めではないと思っています。教育とは、ダイナミックで機能的な過程であると考えます。それは、「共に生きる」ということの一つの特別な方法なのです。ですから私は大人と子どもとの間に個人的な、親密な関係が存在するというところこそ、教育の最も本質的なことであると考えています。

そのような関係を実現するために、私たちには、情緒と認知という二つの面でしなければなりません。情緒的な面としては、子どもが自分自身を発達させることができるような環境 (Climate) を創り出すことです。認知の面では状況を操作することです。子どもを操作するのではなく、状況の方を操作するということが必要なのです。

私は、先にその特徴を挙げたような、諸構造を把握する力の弱い子どもとその両親を助けるために、本当に役立つ方法を見い出さねばならないと長い間考えてきました。これまでしばしば行われてきたのは、心理学者や教育者などが、いかにすべきかについて口頭で母親を指導するという方法でした。けれども私は、そのようなカウンセリングの方法は役に立たないのではないかと考えています。私は両親と一緒に行動することによって、両親を助け

ようと試みています。両親との話し合いも、単に問題だけを取り上げるのではなく、協力して状況を変化させていくという方向でもたれています。人は、自分で自分の置かれている状況を理解することができれば、自発的に自分の態度を変えていくことができます。と私は信じているからです。

## 実践の方法

それでは、子どもが実際に行っている方法を紹介することにしてみましょう。

私のところでは、大学院修士課程の学生がアシスタントとして、子どもの生活の場である家庭に、週に二回、二時間、出かけていくという方法をとっています。このやり方ですと、母親に脅威を与えません。アシスタントは権威者ではありませんし、母親を監督したりしないからです。それに、アシスタントにとってもその子どもはやはり問題なので、常にうまくできるとは限りません。そのためにかえって母親が勇気を持ったり、私たちと同じようなものかわ、という安心感をもつ余地があります。

私は今、「動く」という方法についてお話ししているのであって、言葉によって母親の態度を変えようとしているわけではありません。

せん。

さて、母親は、子どもと本当の教育的な関係を実現することができないのですが、そういうところにアシスタントが出かけていって、新しい関係をつくり出していきます。母親は子どもとアシスタントの関係、やりとり、遊びを見ています。それを見ることによつて、母親は自分の態度、それまでのやり方を変えるようになりまふ。母親がアシスタントの方へ動き始めるのです。

アシスタントは子どもに行つて二つの働きをします。遊びの形での機能的な訓練と、社会的な行動の訓練です。また、子どもに通っている幼稚園、あるいは小学校に行つて、担任の教師と話し合いをしたり、近所の子どもたちと一緒に遊んだりして、子ども環境全体にわたつて把握するように心がけます。

治療の過程は六つの段階にわかれます。第一段階は子どもを実験し、治療計画をたてることです。この段階で両親は、専門家にすべてまかせてしまうのではなく、あくまでも子どもに対して責任があること、また、話し合いや子どもとの関わりにおいても果たすべき役割があることを学びます。

第二段階は知り合ひ期間です。アシスタントは初めて子どもの家を訪れて、子どもと出会います。また幼稚園あるいは学校にも

行つて、そこで子どもと出会います。それによつてアシスタントは、家庭、幼稚園、学校、あるいは近隣の、その子どものあり方を知るのです。そうした過程を経てから、再び両親、アシスタント、それに私が集まつて、はっきりとした計画をたてます。そういう集まりの時には、きわめて具体的な、二―三週間位の短期間の計画がたてられます。

次の第三段階は、治療の実際としては最初の段階となります。この段階では両親は非常に熱心です。熱狂的と言つてもよいかもしれせん。私たちの大変さを理解してくれる人がようやく見つかつた、間もなくすべてがうまくいくだろう、と考えるからです。

子どもの機能訓練が始まります。機能訓練は、視覚や聴覚、空間の認知などを助けるような様々な異なったタイプの遊びを通して行われます。また、社会性の教育として、兄弟や近所の子どもたちと一緒に遊ぶという状況をつくり、その中でより状況を分析、理解できるように援助します。

この時期に大変興味深いのは、子どもが自分のテリトリーにいるということ。一般には、子どもの方が研究所、プレイルーム、教室など、自分のテリトリーとは違う所に連れていかれることがほとんどですね。そういう時、子どもはいつもと違う行動を



するのです。これは大変興味あることです。ところが子どもの家に行く場合は、私たちの方がゲストになります。多くの場合はこの逆で、私たちの方が自分のテリトリーに陣取って、子どもがゲストという状況です。どなたか、自分の家にいる時と、見知らぬ慣じみのない所にいる時の行動の違いを研究なさるとおもしろいと思います。

さて次は第四段階、実際の治療の第二段階ですが、この時期の特徴は両親が少し否定的になることです。二、三週間に一度、アシスタントは夜、両親を訪問して子どもの様子について話し合いますが、そういう話し合いの時に、両親は少し否定的な様子を示します。アシスタントと協調してやっというとしなくなり、以前のよう熱心でなくなり、アシスタントが別のやり方を提案する時など多少の抵抗があります。私はこれを、敷居を前にしてそれを渡らねばならないのだけれども、今はまだ向こう側に行きたくない、という状態にあるためと考えています。また、両親が当初期待していたより治療に時間がかかる、ということも一因でしょう。けれども私たちは、両親が治療に対して否定的になってきたということも、この時期の成果であると考えています。というのは、例えばアシスタントがある考えを出した時に、「それはそうですが、でもこれも考えられます」と両親が応

じるのは、新しい別の考え方、別の可能性を両親が出してきているということだからです。

この時期には、子どもの方は以前より家庭内での訓練ではうまくいくようになっていきます。アシスタントは徐々に家から外に向かって、街頭や公園などに子どもを連れ出して、他の子どもたちと遊べるようにしていきます。初めの頃のようにアシスタントが積極的に援助しなければならぬことは、ほとんどなくなってきました。他の子どもたちと遊べるようになってきますし、ただ状況があまりに混み入っているような場合だけは、アシスタントが関わるという段階になっています。

このように、子どもが外に出ていき、他の子どもたちとも遊ぶようになってきたということが、あるいは、両親の多少否定的な態度のもう一つの原因なのかもしれません。というのは、それまで子どもは外ではいつもばかげたことをしてしまっていたので、母親はおそらく、自分の子どもが外でよその子どもたちにはかにされたり、いじわるをされたりするのではないかと心配しているからでしょう。

次の段階になりますと、両親は肯定的で、現実的な熱意を示すようになります。母親は今や、アシスタントの位置に立って、状況を自分自身で変えることができますようになっています。

います。夜の話し合いで大切にされるのは、一緒に動いたこと、見たことそのものを話し合うということです。そのような積み重ねを経ることによって、母親と子どもとの距離が変わっていくことに気づかれるでしょう。母親は、子どもをどうしたらよいかわからなかった時には、感情的に子どもの中に取り込まれてしまっていました。けれども、子どもとの距離がひらくにつれて、より客観的になり、子どもの行動を前よりもずっと受け入れることができるようになるのです。この頃になりますと、子どもは家でも外でも、友達との関係では、よく行動することができています。

そして、治療の最終段階、関係を断つ段階がやってきます。ここでは母親に、不安や心配が生じるかもしれませんが、そういう母親のために、また子どものために、この段階は数週間の時間をかけて行われます。「私一人になつてしまったらどうしましょう。何をしたらよいのでしょうか。」と不安を訴える母親もいますが、そういう時には、アシスタントから独立しても、もう十分やっていると保証して励まします。また、問題が起こったり心配がある時には、いつでも私どもと関係を回復することも伝えておきます。

以上御紹介しました治療は極めて徹底したものです。私がこの

全コースを実現できるのもみな、私の学生たちのおかげです。学生たちはそれに対して何の報酬も求めません。

実際には、この治療過程を完了するのに数週間しかかからない家族もありますし、もつとずっと長くかかる場合もありますが、結果は大変満足のいくものです。調査によれば、特に両親が得た体験は大きく、この治療方法に大変肯定的であることが目立っています。

私の話は以上ですが何か問題はありませんか。しばらく皆さんの質問をお受けしましょう。

\*

\*

——状況を操作するとおっしゃいましたが、具体的にはどんなことをするのですか。

一つ例をお話ししましょう。プレイルームでグループ・セラピーをしていた時のことです。七、八歳の女兒たちがお店やさんごっこをしていました。一人の女兒が台の上に並べた色々な品物を

売っています。その中に一つおもしろいケーキがありました。

そこへ、他の子どもが品物を買いにやってきました。ドアのベルを鳴らしてお店に入ると、お店中のものをながめまわし、ケーキを見つけて、「あれください」と言いました。店番をしていた女兒は困惑してしまって、どうしたらよいのかわからなくなりました。ひどいけんかになるかもしれません。そこが問題ですね。そこにセラピストがドアのベルを鳴らして入ってきました。「ケーキ工場の運転手です。ケーキを運んできました。」と言って、ケーキを台の上に並べました。さあ、子どもたちは解決を見出ししました。それが状況を操作することです。もちろん、いろいろなやり方がありますが。

——今の例ですと、状況の操作ということが、子どもたちの遊びがそれによって発展していくように、という観点でなされているように思いますが、先ほどのお話にあったような機能的な面の発展ということと、どのように関連しているのでしょうか。

もう少しそれについてお話しした方がよいかもかもしれませんね。

私は、子どもは世界を分析しつつ生きていると思っています。今申し上げた例でも、子どもはその具体的な状況を分析していたわ

けです。世界の構造を分析することは、別に時間をかけてやることではありませんね。例えば何かの集まりに出席する時、部屋に入るだけで、多くの場合、特に考えることなしに、そこにいるメンバーが自分に何を期待しているかを理解することができずね。また、車を運転している時に、サインが出たわけではなくのに、前を走っている車が左にまがるかもしれない、と急に感じたりする時があります。そういう時、私たちはその場の全体的な状況から、そういう可能性を予期しているのです。私はそれが認知的な機能であり、また創造的な想像力であると思っています。

さて、構造の把握ということに関しては、色々な可能性が考えられます。まず普通の子どもです。こういう子どもには、別に何をする必要はありません。それから二番目に、構造の分析力の弱い子ども。例えば、何か失敗しても、その子にはなぜ失敗したのかわからない、という場面がありますね。失敗しても、いつも自分が正しいと信じていて、失敗の理由に気付かない。これは分析力の弱さから来るものです。三番目の可能性としては、感情の面でもあまりにもきつく縛られてしまっている子どもです。そういう場合には、子どもを押しつぶすほどの感情を生じさせている構造を、もっと単純なものにかえる必要があります。ちょうど、先ほ

どのケーキの例の場合のようにですね。構造が複雑で、多くの社会的な役割が入り込んでいます。そういう関係をもう少し単純にして、そこに自由があるように状況を操作しなければならぬわけです。四番目は、構造が固定していて、非常に形式的になっている子どもです。私の知っているある自閉的な子どもは、第二次大戦も終りの頃のことですが、週に二回必ず広場に行くという行動様式をもっていました。爆弾が落ちてきて、命が危いような時でも、広場に行かないでは済みませんでした。やがて、アメリカ軍が上陸してドイツ軍が敗れ、私たちは解放されました。自由になったのです。けれどもその子どもは、戦争中と同じように広場に出かけ続けました。彼には解放は訪れなかったのです。皆さんの中にも、土曜日には公園に行かなくては気が済まないとか、毎週土曜日には必ず祖父父母の家に行ってしまう子どもがいるとか、それに類したことがあると思います。そういう時には構造を変化させなければならぬわけです。

私はきょうは、特にそのうちの二番目の可能性についてお話ししてまいりました。そういう子どもとの関わりの中で、私たちは二つのことをしなければなりません。一つは子どもにふさわしい生活状況をつくることであり、もう一つは子どもがそれを分析して、何が起きているのかを理解できるように援助することです。

す。そのために私たちはまず最初に、子どもが自分でなしとげることができたという体験を持てるように気を配ります。できるだけ単純な状況の中で一緒に遊ぶことによって、初めて子どもは「あ、うまくできた。楽しいな。」という体験を得ることができるよう。半時ほど、けんかもなく、問題もなく、他の子どもがじゃまをすることもない、という穏やかさの中で、共に楽しく遊ぶ体験を得るのです。

私の国では、男の子たちはフットボールが大好きです。一番良い訓練は、実際にグラウンドでフットボールをすることなのですが、もし世界チャンピオンになりたいと思うなら、走る・跳ぶ・ヘディングなど、部分部分の技の練習もしなければならぬのです。一つの完成されたフットボール試合をするためには、部分の訓練が必要であるように、今私たちが討論している問題にも同じことが言えます。身体の訓練とか聴覚の訓練とか運動の訓練など、個々の訓練が必要になってくるのです。

視覚による記憶とか聴覚による記憶、例えば言葉覚えるとかの訓練もします。なかでも大変重要なのは、空間の関係を知らぬ訓練です。子どもは非常に非常に複雑な状況を学ばなければならぬのですが、最初は非常に単純なやり方から始めます。子どもと手をつないで、例えばその木まで歩いていき、そこから土手に行

って、再びもとの場所にもどってきます。そして子どもに、「私たちはどこをどういう風に歩いてきたの？」と尋ねます。これが空間の訓練の一つです。そういうことから、子どもは高低・前後・左右などの空間関係を知ることができます。

子どもと一緒に遊んでいて、うまくいかなかった時にはもう一度やり直します。そして繰り返し話し合って、何が起こったのか、なぜまちがったのかを分析できるようにということを心がけています。

——母親のあり方、子どもへの関わり方が、問題の原因であるとお考えですか。

これは大変複雑な問題ですね。私は長い間、微細脳損傷(MBD)があるといわれている子どもをみてきました。彼らは大変多動でもありました。MBDというのは医学の概念であって、教育の概念ではありません。子どものMBDについては多くの研究がさかんに行われてきました。今では全人口のうち男性の54%、女性の46%がMBDであると言われていきます。この部屋には三人の男性がいますが、そのうち二人はMBDで、一人はそうではない、こちら側半分にお座りの女性は全員MBDであるということ

です。ずいぶん大きな数ですね。MBDとは何か、それこそ問題なのです。MBDという概念を用いれば、非常に多くのことが言えてしまいます。MBDは、多動であったり、形式主義的な行動をするとか、神経症であるとかの原因となりえるでしょう。けれども、MBDがある人のほとんどは実際には正常なのです。ですから私がMBDという言葉を使う時には、MBDがあり、かつ多動性の重大な行動異常がある、と言わねばなりません。

けれども私がきょう皆さんにお話ししたのは、もっと穏やかな形の行動異常のある子どもについてです。最近では、そのような子どもが私どもの相談所へ来るケースが多くなっている、というのが一つの問題でしょう。彼らにはMBDはありませんし、必ずしも多動というわけではありません。にもかかわらず、MBDがありかつ多動である子どもと全く同じような行動異常があるので、その原因としては第一に、今日のオランダでは両親が子どもをどのように教育したらよいかを知らない、ということが挙げられるのではないかと思えます。第二次大戦以前は、私の国の文化は非常に伝統的なものでした。親であれば必ず、子どもはいかに行動すべきかを知っていました。親であれば、自分の子どもを指導することができたのです。

けれども大戦後、二つの流れが出てきました。第一の流れは、

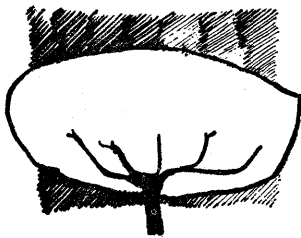
フラストレーションを起こす恐れがあるから子どもを厳格に育ててはいけない、と発言した精神科医や心理学者たちによるものです。人々は、子どもに何かすることはできないと考えるようになりました。二番目の流れはもう少し遅れて、一九六〇年頃、西欧で起こった文化的な改革です。学生たちが、大学の儀式的で硬直化した問題の改革に取り組んだのですが、そこに出てきたのが権威の否定でした。もう真の親はいなくなり、子どもたちに何も言うことができなくなったのです。

今や私の国の親たち、特に上層の親たちは子どもたちのために何をしなければならぬのかわからなくなっています。彼らはおえて教育しようとしません。両親たちは、子どもたちが世界を秩序だて、限界を見出すための援助をしません。私はそれが構造の把握力の弱い子どもたちの中心的な問題であると思います。それは、現代の文化情況の典型的な現象と言えるのではないのでしょうか。社会が権威的な時期には、神経症の子どもが時代の典型的な文化現象だったのです。

(一九八一年六月十二日・お茶の水女子大学にて)

〔筆者紹介〕

Dr コックは、オランダのニトレヒト大学の特殊教育の教授である。十日間ほどの短い来日の期間に、お茶の水女子大学で講義をして下さった。コック教授は、大学で講義されるのみでなく、実際の教育・治療にも関係しておられる。実践と理論とは切り離すことができない、一つのものであることを語られ、聴衆の学生が両方の訓練を受けている人々であることを喜んで話された。



〔史料紹介〕

『邦訳 日葡辞書』⑤

——わが国中世の児童文化史研究によせて——

M・M・M

F字で始まる語

(承前)

ヘナモ (へなも)

子供に起こる、はしかのような或る病気。九州方言では、

これをヘボ (へぼ) と言う。

ヘンゲン (片言)

すなわち、片ことば。不完全な言葉、または、どんな言葉  
であれ、人の心を打つ力のある短い言葉。

1) 日仏辞書はこれを(人の感情をそこねる)と訳している。

ヘソノヲまたはホソノヲ (臍の緒)

赤子の臍に残っているはらわた。

(例) ヘソノヲヲ キル、ツグ<sup>1)</sup> (臍の緒を切る、継ぐ) 上

述のようなはらわたを切断する。

1) 「切る」の忌詞。

ヒボヲトシまたはラビナヲシ (紐落しまたは帯直し)

九歳までの子どもがするような、帯を後ろで結ぶやり方を  
やめて、前の方で結ぶこと。

ヒボまたはヒモヲトシ (紐落し)

日本の子どもは、九歳になるまでは帯を後ろで結ぶ習わし

であるが、その結び方をやめること。

ヒコ(曾孫)

曾孫

ヒコヒコマコ(ひこひこ孫)

玄孫

ヒマゴ(曾孫)

曾孫

ヒメ(姫)

娘、または若い婦人。

ヒメギミ(姫君)

貴人の娘。

ヒメゴゼ(姫御前)

若い女の子、または若い娘。

ヒメミヤ(姫宮)

王侯貴族の娘、特に国王の娘。

ヒモ(紐)

紐、または革紐。

(例) ヒモヲ トク(紐を解く) 八ないし九歳の子どもの

帯を解いて取りのけ、それとは別の帯を締めさせる。

(例) サンノ ヒモヲ トク(産の紐を解く) 婦人がお産

をする。

また、日本で書状の封をするのに使う封緘<sup>1)</sup>。

1) ここでは紙縫<sup>ヒヤ</sup>を言うのであろう。

ヒモジ(ひ文字)

空腹である。これは婦人語である。

ヒモトキ(紐解き)

子どもの帯を取り替える際に行なわれる祝い。帯直しと言  
う方がまさる。

ヒナ(雛)

人形。

(例) ヒナ アソビ スル(雛遊びする) 人形で遊ぶ。

ヒナ(雛)

鶏の子、あるいはその他の大きな鳥の子をさす<sup>1)</sup>が、特に雛  
の子の意にとられる。

1) ここでは鶏の雛をさす。

(例) ヒナガリヲ スル(雛狩をする) 雛の子の狩をする。

1) ここでは鶏の雛をさす。

ヒナツル(雛鶴)

詩歌語。すなわち、若い鶴。

ヒキュウト(低人)

こびと。イッスンボウシ(一寸法師)とも言うが、ヒキュ



ウトほど正しい言い方ではない。

ヒロイゴ (捨子)

ある所で見つかった捨子。<sup>1)</sup>

1) 日西・日仏両辞書で、ともに捨子の他に捨てた物をも含

めているのは疑問。

ヒタイガミ (額髪)

子どもの額の長い髪。

ヒトダネ (人種)

すなわち、ヒトノ タネ (人の種) 人間の血統、あるいは

種。

(例) ヒトダネガ ツクル (人種が尽くる) 人間の種属が

すっかり絶え果てる。

ヒトハラ (一腹)

腹を数える言い方。

(例) ヒトハラノ コドモ (一腹の子供) 一つの腹、すな

わち、一人の母親の産んだ子ども。

ヒトガマシイ (人がましい)

動作や礼儀作法などが大人のように、すなわち、一人前の

男のように見える。時には、いざさか過度に自分を一人前

の者として強く見せかける意味にも取られる。

ヒトガタチ (人形)

人の姿、あるいは容貌。

ヒトリ (一人)

一人の男、または一人の女。

ヒトリゴ (独子・一人子)

一人きりの子。

ヒウバ (曾祖母)

曾祖母。

ヒラウチ (曾祖父)

曾祖父。

ヒヨコ (雛)

雛鳥、あるいは、鶏の子

ホウビキ (宝引)

数本の細い綱に「銭」と呼ぶところの貨幣をつなぎ通して

行なう、勝負事の一つ。

(例) ホウビキヲ スル (宝引をする) この勝負事をして

遊ぶ。

この頃、ふと、思うことがある。それぞれの保育者が、「ほんね」だけで子どもと向き合ってみたらどんな毎日が展開されるだろうか。

「教育」とは、すべからく目標を目指し、綿密な計画に基いて、時間を効率的に活用する以外にない、と、本気で思っていて、しかも、そんな毎日が、幼児にとっても必要かつ快適であると疑いもなく信じこめるとしたら、先ずは、それを追求してみたらよい。逆に、幼児が一番いきいきしているのは、自分のしたいことが見つかって、それに熱中出来るときなのだし、彼らが本ものの生活をするとは、好きな遊びに打ち込む以外にあり得ないと、本心から思っているのだったら、それを徹底的にやってみたらどうであらう。もちろん、全身これ常識とバランス感覚のかたまりであって、ほどほどのバランスこそ最高と、体の底から信じこんでいるのだったら、それも結構では

ないか。

とにかく、自分が本当にやってみたいのは、どんな幼児との生活なのかを、一度、つきつめて追いかけてみる必要があるのではないだろうか。

価値の多様化が叫ばれ、ものごとが一元的に整除しにくい時代が訪れている。そんな動向の中で、もしかしたら、一番とまどっているのは、保育者なのかもしれない。自分の「ほんね」がよくわからないのに、どの「たてまえ」を選んだらよいかと、おろおろしているのだから。

六領域、総合活動、或いはオープン・エデュケーションなどと、上からの指導理論も、時として無節操である。それらに従順に、慌しく装いを変えるくせがいつか身について、自分の「ほんね」が曖昧になってしまう。そんな歴史は、この辺で打ち切りに出来ないだろうか。(H)

## 幼児の教育 第八十巻 第十一号

十一月号 © 定価二七〇円

昭和五十六年十月二十五日 印刷

昭和五十六年十一月一日 発行

112 東京都文京区大塚二ノ一ノ一

お茶の水女子大学附属幼稚園内

編集兼 発行人 津 守 真

112 東京都文京区大塚二ノ一ノ一

お茶の水女子大学附属幼稚園内

発行所 日本幼稚園協会

108 東京都港区三田五ノ一二ノ一

印刷所 図書印刷株式会社

101 東京都千代田区神田小川町三ノ一

発売所 株式会社 フレーベル館

振替口座東京九一九六四〇番

◎本誌御購読についての御注文は発売所 フレーベル館にお願いいたします

※万一製品不良品がございましたら、おとりかえいたします。

持ちやすい、ポケットサイズの

# フ レーベル 新書

全25巻のうち、子どもたちの大好きなゲームや遊びの本を、選んでみました。アイデアとコツが、豊富に紹介されています。

## 4. 楽しい遊び〈室内・園庭編〉

日本児童遊戯研究所編  
有木昭久・湯浅とんぼ共著

B6変型判・144頁・500円・〒200円

園舎や園庭がせまくても、特別な準備も不必要。みんなですぐにできる楽しいゲームや遊びのアイデアが豊富に紹介される。

## 5. 楽しい遊び〈伝承遊戯編〉

日本児童遊戯研究所編  
有木昭久・湯浅とんぼ共著

B6変型判・144頁・560円・〒200円

子どもたちに愛されて、昔から現代へ受けつがれてきた素朴な伝承遊戯を、現代っ子の感覚にマッチするよう考察を加えて紹介される。

## 6. 楽しい遊び〈園外編〉

日本児童遊戯研究所編  
有木昭久・湯浅とんぼ共著

B6変型判・144頁・500円・〒200円

遠足や、園外保育のとき、公園や岡や野原の草木などを利用して、おとなも子どもも楽しく遊べるアイデア一杯のハンドブック。

## 17. 楽しいことば遊び

敷島妙子著

B6変型判・104頁・550円・〒200円

幼稚園や保育園で、すぐに応用ができて、しかも愉快でやさしいことば遊びがたくさん紹介されている。子どもはもちろん、大人も十分にたのしめる。

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社営業課(03)292-7781(代)にお問い合わせください。

フレーベル館

# 新刊案内

## 乳児の保育

久保登志子・中村千代・丸尾ひさ 共著

A5判・224頁・定価1,300円・H2509

0～2歳までの乳児保育の実践と、  
指針を示しています。

背骨が曲っている、すく骨折する、朝から欠伸をして、授業にのつてこない等と、子どもの危機が叫ばれている昨今、そのルーツは乳児期の育てられ方にあるのではないかと言われています。健やかで意欲的な子どもを育てるために保育者は何をしなければならぬか？長年乳児保育を実践して来た三人の著者に豊富な事例と体験を語ってもらいました。

## 幼児の造形百科

桜井俊夫 著

B5判・248頁・定価1,600円・H2309

幼児の造形活動に関する幅広い知識と技術を身につけよう。

本書は幼児に必要な造形活動の基本的な考え方をはじめ、子どもの発達に応じた指導計画のたて方、さらに具体的な素材別指導方法などをとりあげた総合的な造形指導百科です。「描く」「写す」「映す」「作る」「壁面構成」の五つの柱からなっていて、身近な紙、粘土、木、発泡スチロール、段ボール箱などの特色を使った造形遊びの指導書です。